

タカハ劇団第十五回公演

僕らの力で世界があと何回救えたか

脚本 高羽彩

この戯曲を許可無く掲載・上演することを固く禁じます。掲載・上演に関するお問い合わせは、
タカハ劇団 info@takaha-gekidan.net まで、お問い合わせ下さい。

登場人物

朝利(あさり)

板垣(いたがき)

望月(もちづき)

池谷(いけたに)

生島(きじま)

横内(よこうち)

ゆうきかおり

朝利祐子(あさりゆうこ)

舞台

太平洋側の湾に面した、小さな漁村——沖浦市。

そこにある夜の高校。

校庭に面した窓からは簡素な町並み、さらにその先に海が見える。

湾には「沖島」が浮かび、その上に「沖浦市沖島アジア高エネルギー加速器実験機構」
通称、「研究所」がそびえ立っている。

時折、研究所から実験開始を告げるサイレンが聞こえ、警告灯が光る。

○オープニング

暗闇。

どーっという、地響きのような波音。

広大な空間にひしめき合う風の音。

それらが、真夜中の海辺に一人立っているような、心細い気持ちにさせる。

雨合羽の人々が、水面にライトを当てながらなにかを探している。

暗闇に舞う、黄色いレインコート。

風に揉まれるうち人の姿になる。

風に翻る裾。

それを見つめるように、朝利が呆然と立ちつくしている。

朝利「こう……棒があるんです。はい、(手で示し)棒です。それでその両端に、黄色いレインコートを着た人と、俺が立ってるんです。で、よくわかんないですけど(言い直して)変なんですけど、俺はもうわかってるんですね。もうすぐ、どっちかが落ちて死ぬって。それで………。ホッとするんです。よかったあつて。俺が落ちれば、彼は死ななくてすむんだつて。なんだ、よかったつて」

朝利、倒れ込むようにして、

暗転。

○1. 市役所公用車内

雨降る夜道。

運転席に横内、後部座席にゆうきが乗っている。

時折、街灯が二人の頬をかすめていく。

横内の携帯が鳴る。

横内それを気にし舌打ちするが、出ない。

携帯鳴り続ける。

横内「(人当たりよく)いいんですか?」

ゆうき「え?」

横内「よかったですか? こんな遅くに」

ゆうき「あ、いや、お願いしたのこちらですし。すみません、わざわざ駅まで。これ公用車

ですよね」

横内「そんなたいしたもんじゃ(笑)」

車体には「沖浦町」の文字。

横内「この時間になるとね、もうバス無くなって」

ゆうき「あ、ですよね」

横内「すみません田舎で。吃驚するでしょ？ 東京は凄く遅くまでバス走ってますもんね。

電車もね。この辺はね、外出ようと思っただらもう車しかなくて。自家用車かバス。バスは

こどもたちの帰宅時間にあわせて終わっちゃうでしょ。いやあ〜東京は便利でいいなあ」

ゆうき「あー、便利みたいですね」

横内「え？」

携帯の音途切れる。

ゆうき「普段あまり、電車もバスも」

横内「ああ！ そうですね！ 先生ですもんね！」

ゆうき「ただの引きこもりで」

横内「何言ってるんですか先生！」

ゆうき「いやいやいや(気恥ずかしくて)」

横内「でもね……ふふ。駅出来るんですよ、沖浦にも」

ゆうき「そうなんですか」

横内「来春ですけどね。本当は研究所の稼働スタートに合わせて駅も開業したかったんですけど、ちょっとずれちゃって」

研究所のサイレンが遠くで聞こえる。

木立の間隙から研究所の灯台が見えるので、ゆうきはそれを必死で目で追う。

ゆうき「あれ……」

横内「あ、見えました？ アレがアジア高エネルギー加速器実験機構ですよ。立派でしょ

う？ あの研究所のおかげでね、沖浦は生まれ変わるんですよ」

ゆうき「へえ……」

横内「やっぱアレですか？ 作家先生って言うのは、皆さんずっとおうちにいらっしやるん

ですか？」

ゆうき「いや、そんなことないですよ。私が引きこもりなだけで」

横内の携帯鳴る。

横内「(電話出て) はい横内。今運転中。(電話切ろうとするが) 運転中だって。いや切る気ないなら『今電話よろしいですか』って聞くなよ、マニュアル人間が。いいよ、なに。：いや運転中だけど。え、じゃあ切るよ? なんだよ! どうせ喋るんなら『運転中なのがいいんですか?』って聞くなって! ……うん。組合がまだごねてんの? いやそれはさあ、現場でなんとかしてよ。今俺に言われたってなんにも出来ないよ。ちょっと、次長に代わって」

ゆうき「明日から運転開始ですっけ」

横内「え? そうですよ? 試運転はもうやってるみたいですけどね。サイレン聞こえませんでしたよ。(電話に向け) あ、もしもし? うーん。岩見さんには連絡した? いや、しろよ。組合との間にはあの爺さんに入ってもらってるんだからさ。寝てるんだろどうせ、年寄りだから。起こせばいいだろ、こっちだって金払ってるんだから。…とにかく、そっちのことはたのんだから。明日、会場に組合の連中がずらりなんてことだけは勘弁してよ? はい。はい」

横内、電話切る。

横内「すいませんね、どうも」

ゆうき「何か問題ですか?」

横内「いえいえいえ! これから我々市職員をはじめ、住民一丸となって沖浦を盛り上げていきますから! ゆうき先生みたいな人気の作家先生にご協力いただけて本当に嬉しいですよ!」

ゆうき「いやそんな、何も出来ませんよ?」

横内「またまた。明日の市長とのトークイベント、チケットの売れ行き凄くいいじゃないですか! 東京からも若いお客さんたくさん来られるみたいで! ライトノベルって言うんですかね? 最近は凄い人気なんですよ? おかげさまで、明日のサイエンス祭は、大成功間違いなくともうみんなで浮かれちゃって!」

ゆうき「あの、イベントの後は」

横内「あ、もちろんお約束通り、研究所の取材は手配してありますから! じゃんじゃん取材して、じゃんじゃん書いていただいて! 沖浦を舞台にしたアニメなんか出来たらいいじゃないですか!」

ゆうき「そんな期待しないで下さいね?」

横内「いやでも、ライトノベルって、アニメになる小説なんですよね?」

ゆうき「ええ?」

横内「うちの観光課なんか大盛り上がりですよ! いや楽しみだなあ!」

ゆうき「全部がアニメになるわけじゃ」

横内「ええ？ ライトノベルなの？ さすが、うれっこになる人は姿勢が謙虚ですね！

アレ、あの人とかにやってもらったらいいじゃないですか。ハヤオ」

ゆうき「ハヤオ？」

横内「宮崎駿」

ゆうき「いや、ハヤオはラノベ、やらないんじゃないですかね?!」

横内「ええ？ やればいいのにね、ハヤオも。そろそろ新境地開拓したっていいでしょう。

いい年なんだから、いつも同じような絵のアニメばっかやってないで、ねえ？」

ゆうき「……そうですね（めんどくさくて）」

横内「明日、取材の前に、祭もご案内しますよ。アイドルちゃんも呼んでますし、テキ屋も
たくさん来ますし、町民が有志でイベントブースやってたりしますから、科学っぽい感じ
の！」

ゆうき「科学っぽい感じ」

横内「まさにこの沖浦が科学の町として生まれ変わる！ そういう様子も是非、作品に盛り
込んでいただいて」

ゆうき「がんばります……」

再び横内の携帯に着信。

横内「はい横内。だから運転中だけどいいよって！ なんで起きねえんだよ！ 死んでんじ
ゃないの？ いやもうさ、それは合意済みじゃない。その一点で押ししかないよ。明日の
祭でなんかあったら損害賠償ものだよ？ そういって。向こうはごねたいだけなんだ
からさ……うん……うん……」

ゆうき「あの、ほんとに大丈夫なんですか？ 電話、運転」

横内「ああ、もうこの時間は誰も通りませんから。狸とか、猪ぐらいで」

と、横内急ブレーキ。

横内「わっ！ なんだよ！ すみません！」

ゆうき「あ、いえ……」

横内「(電話に) ああ、なんでもないっ。すぐかけ直すわ！」

横内、引き続きゆうき車外へ。

ビニール傘から雨が滴る。

横内「ああ……狸だ」

ゆうき「……」

横内「どうします?」

ゆうき「ええっ……」

横内「まあいいか……」

横内、狸の死骸を拾おうとしやがむ。

と再びサイレン。

研究所の灯台が光る。

ゆうき、灯台を見つめる。

ゆうき「あんな小さな島に……」

横内「(狸はほうっておいて) 秘密基地みたいでかっこいいですよね! あの沖島から、世界的な発見がじゃんじゃんされるんですよ! 燃えませんか? 作家先生として! どうですか!」

ゆうき「そうですね」

横内「さ! 行きましょう! 会場はこの先の沖浦高校になってます。設営の取材がなさりたいってことでしたら、作業時間の終わらないうちに!」

ゆうき「はい」

横内、再び狸の死体をかたづけようとして、

横内「あれっ!」

ゆうき「どうしました」

横内「狸、いなくなっちゃいましたね。驚いてひっくり返ってただけかあ」

○2、沖浦高校・無線部部室

研究所の、妙に間の抜けたサイレン音が聞こえてくる。

古い机が乱雑に積み上げられた教室。

朝利、板垣、望月、池谷が居る。

朝利、ガラクタの山を漁っている。

校庭からは、祭の会場を設営している音、ステージ音響をチェックしている音などが聞こえてくる。

校内放送「サイエンス祭実行委員会よりお知らせです。校内に残っている女子生徒は、十時までに、完全下校してください。ただいま、正門、西門、中央階段、体育館渡り廊下は資材搬入専用通路となっております。風紀委員会からお知らせです。本校在校生は、作業時学校指定ジャージを着用して下さい。繰り返します……」

強い風に窓枠が揺れる。

池谷は、妙なコードの出た小箱を手にしている。

望月「職員室」

板垣「ダメだよ」

望月「あの、アレは？ 実験室」

板垣「きーびしいんじゃないかな？」

望月「図書室」

板垣「ダメダメ」

望月「保健室」

板垣「ダメ」

望月「トイレ」

板垣「ダメだろ（笑）」

望月「男子トイレだよ？」

板垣「あ……」

池谷「いやダメでしょ。バカか」

望月「え〜」

池谷「トイレにこんなもん（小箱）置いたら、あんたたちそれ盗聴だよ？」

板垣、望月、「やれやれ」と顔を見合わせる。

池谷「なに」

望月「いや先輩、そこから？」

池谷「は？」

望月「板垣ちょっと説明してよ〜」

板垣「いや俺言ったけどな（笑）」

望月「言ってたけどね、さっき」

板垣「わかりやすく説明しますけどね、それは、発信器」

池谷「ええ？」

板垣「そこから発信した電波を、こっちのアンテナで拾うの」

望月「出すだけだから。集音器ついてないでしょ」

板垣「集音器ってのはマイクのことね」

望月「見ればわかるけど」

池谷「……（無然）」

望月「なんでそれで盗聴って発想になるかな。オタクねー」

池谷「オタクって言わないで」

望月「無線ってモノを根本から理解してないでしょ」

板垣「偏見があるし」

望月「ある。無線なんてやってる人間は盗聴趣味の特殊性癖嗜好者なんだわキモーい」

池谷「おもってないよ」

板垣「よくないなそれは。教育者としてよくない。正すべき」

池谷「いたがき」

板垣「はい、すいません」

池谷「とにかくトイレは無い」

望月「はあく（ため息）」

板垣「悪いね、どうも」

池谷「早く決めないと。明日十時にはお祭りスタートしちゃうんだからさあ」

朝利「あったあったあった！」

望月「あ、マジでマジでマジで？」

板垣と望月わらわらと朝利によっていく。

朝利、ガラクタの中から無骨な無線機を取り出す。

朝利「アイコムのIC-720〜！」

板垣「望月「おお〜」

池谷「ねえ、ちよつとお〜」

朝利「（埃を吹く）ふうっ！ ふうっ！ ふうっ！ ふうっ！」

板垣・望月「やめるやめるやめる」

朝利「これ繋いでいいんだよね?!」

板垣「ああ、大丈夫なはず」

望月「（何かを喋りたそうだがむせている）」

朝利「うえ〜い（配線をなにやら弄り始める）」

板垣「動けばね」

朝利「これもうほとんど化石だろ〜」

望月「（会話に加わろうとしているがむせている）」

朝利「（配線しながら）アンテナは？」

板垣「屋上」

朝利 「そっちもまだ生きてんだ〜！ 激アツ〜！ マイクは？」

板垣 「それ使っていいよ」

朝利 「イヤホン？ スピーカー？」

板垣 「スピーカーがいいよ」

朝利 「この時間だとうだろな〜」

板垣 「マサさんとかいっちゃんちゃん（144）あたりでラグチューしてないかな」

望月 「（咳き込みながらも会話に加わりたそうなので）」

板垣 「なにになになになに〜」

朝利 「テンション上がるよねえ！」

望月 「き…かん…しえん…」

板垣 「離れる離れる離れる」

三人、埃を避けるように散らばる。

朝利、窓を開ける。

朝利 「あ、雨だ…」

池谷 「えー」

校庭からポップミュージックのイントロが聞こえてくる。

朝利 「あ、もしかして吉峰蘭来んの？」

望月 「え、マジ？ どこ！」

朝利 「今はいないよ（笑）」

朝利、窓を閉めるが、望月はそのまま外を見ている。

望月 「気合いはいつてんなー。後輩諸君走り回っちゃって」

朝利 「ステージなんか作っちゃってー」

望月 「アレ外注業者？」

板垣 「学校行事じゃないからね。沖浦上げての一大イベントだもん」

望月 「外人増えたな」

板垣 「今このへん仕事あるもん」

朝利 「電源入れるよ」

池谷 「いやちょっと」

朝利 「（おおげさに）はい〜？」

池谷 「これどうすんのって〜」

板垣「あゝ」

望月「じゃあ、屋上は？」

朝利「入れまーす」

と、スピーカーから大音量で雑音。

全員驚く。

池谷「なに！」

望月「おいゝ」

朝利「(ポリリューム下げて)ごめーん」

望月「初歩的ミスゝ」

板垣「ちよっと鈍ったんじゃないの？」

朝利「しばらく運用してなかったからな。ゴメン、しばらくはヘッドホンでいい？(自分のカバンからヘッドホンを出す)誰か見つけたら教えるから」

板垣「うん」

朝利「えー……CCCCCQ、(以下、周りの台詞の進行にかまわず続ける)。こちらJ A 2 Y P N、ジュリエット、アルファ、トゥー、ヤンキー、パパ、ノベンバー。どなたかいらっしゃいませんか？こちら、沖浦高校アマチュア無線部です。CCCCCQ、こちらJ A 2 Y P N、ジュリエット、アルファ、トゥー、ヤンキー、パパ、ノベンバーです。9年ぶりの運用です。どなたかいらっしゃいませんか？」

望月「だから、屋上」

池谷「え？」

望月「屋上はおけないんですかって」

池谷「ダメダメ。屋上なんか。立ち入り禁止。なんかあったとき責任問題になる」

望月「いやちよっともおゝ。やめる？」

池谷「ええ？」

望月「先輩が、学校からもなんかサイエンスっぽい出し物しないといけないって言うから、わざわざ帰ってきたんだよ？おれたち。もうちよっと協力的な態度見せてもらえないとや」

池谷「……」

板垣「まあまあまああ」

望月「板垣も、安請け合にしちゃって」

板垣「校長に言われちゃったら、俺らだって、ねえ？(池谷に)」

望月「先輩も、すっかり丸くなっちゃって」

池谷「ええ？」

望月「教師の言うことなんてとりあえず意味が無くても反抗してたのに」

池谷「意味なくはないよ」

板垣「そこはほら俺たちも仕事だからさ。ねえ？」

望月「お前は変わらんね」

板垣「え？」

池谷「……それは？」

望月「あ？」

池谷「朝利君のやつてるそれは？ 凄いなんか、無線って感じでかっこいいじゃん。それをさ、祭にきた子供達にやらせれば？」

望月「だから、無線機の運用は資格があるんだって。逮捕されるよ？ え、ホントにちゃんと言明した？」

板垣「いや、俺言ったけどなあ」

望月「だから、免許がない素人でも出来る、発信器探しゲームやりましょうってはなしになったんでしょうが。なのに発信器置く場所がないってさ、正直疑うよ？ やる気を。俺の有休なんだと思ってるわけ？」

板垣「まあまあまあ。朝利に？ どう？ 誰かいた？」

朝利「んー、ちょっとわかんないなあ」

板垣「みんなやめちゃったのかなあ」

朝利「まあ、俺たちもこの9年ろくに運用してなかったしね。あ、じゃああれやる？」

望月「ん？」

朝利「ミニFM」

望月「うわなっつー!!」

朝利「(歌) えっふえむ。おーきうらこうこう」

板垣「うわやめて恥ずかし」

池谷「なにそれ」

板垣「(照れながら) いや、無線部でね、法に触れないレベルの微弱電波をつかってラジオ番組作ってたのよ」

望月「だいたい半径50メートル圏内ぐらいで。生放送、放送時間未定で、誰も聞いてねーって言う(笑)」

朝利・板垣「(歌) えっふえむ。おーきうらこうこう」

池谷「いやだから何それ」

望月「番組オリジナルジングル」

朝利・板垣・望月「えっふえむ。おーきうらこうこう。88メガヘルツ。俺たちの言葉伝える。青春は行き過ぎる光ではない(終わりそうで終わらない不安定なメロデー) ー) 遠き今日も輝き続ける(めあて星)」

池谷「うるせーしなげーし」

板垣「あ、長い？」

池谷「ジングルでしょ？」

朝利「みんなの意見取り入れてたらどんどん長くなっちゃったんだよね」

望月「めあて星々のところは、エレカシリスベクトね」

池谷「なんか、メロディーも聞いてて不安定になるしさあ」

板垣「え、そう？」

池谷「凄いセンスだね」

朝利「いいじゃんやろうよ！ 冲高FM！ 生放送で祭の実況してさ」

板垣「おお！」

朝利「各ブースから代表者にゲストで来てもらって、出店内容とか説明してもらって」

板垣「いいじゃないじゃん」

望月「ああこの合い言葉を言ったらクレープ半額みたいなことする？」

板垣「これ結構いいんじゃない？」

池谷「それってどうやって聞くの？」

板垣「トランシーバーで」

池谷「いや持ってないじゃんだれも」

望月「もちろんラジオでも聴けるけど」

池谷「いやだから、持ってないでしょいまどき」

朝利「じゃあ、学校のスピーカーから流す」

池谷「それただの校内放送じゃん。あくまで無線部としてさ、科学体験的なイベントにしてもらわないと」

朝利「校内放送だって、広義で考えれば無線と関係ないと言えないこともないわけなくもない」

池谷「はあ？ とにかくダメだよ。校内放送は、放送委員の子達がなんかで使うって言うって
たし」

板垣「ああ、そうね」

望月「嘆かわしいね。こんだけ学校上げててんやわんやしてるのに、現役生からは科学系
イベントの出店いっさい無しか」

池谷「しょうが無いじゃん、いまどき」

板垣「無線部もとっくの昔に廃部になっちゃったし」

望月「サイエンス祭が聞いて呆れるよ」

板垣「間に合わせだもん」

朝利「(無線機弄りながら) 青春は行き過ぎる光では無いく、遠き今日も輝き続ける
めあて星々、ブルースプリング」

池谷「まだ続くの?! その曲」

朝利「いいじゃんやろうよ俺たちだけでもさあ」

望月「余裕があればね」

朝利「やったー！ リョウタって、連絡取れてないの？」

池谷「え？」

板垣「そりゃ、取れてないけど……」

朝利「何してんだろあいつ。リョウタがいればね、もうちょっとやりようあったかも知れないよね。簡易アンテナ立てて、電波のカバー範囲広げたりしてさ。あいつたしか第二級陸上無線技術士もってたでしょ？」

板垣「ああ、そうね……」

朝利「なにしてんだろ、まじで。SNSとかも全然やってないみたいだしさあ。まさかマジで無線一本で乗り切ろうとしてるとかないかな？ ありえるよね、あいつのことだったらさ」

望月「ま、そうだな」

池谷「……」

朝利「あ、見つけた！」

板垣、望月、無線機に駆け寄り、

板垣「だれ?!」

望月「マサさん？ 知ってる人?!」

朝利「や、外の、スタッフさんたちのインカム」

望月「ちょ、聞かせろ！」

朝利、ヘッドホンの片耳をひっくり返して、望月そこに片耳つける。

板垣「俺も俺も！」

朝利、もう片方もひっくり返して、そちら側に板垣耳をつける。

(三人の顔が団子のように連なった状態)

板垣・望月「おお……」

朝利「いや俺が聞けないわ！」

朝利、素早く身をかがめるとヘッドホンから離れ、急いでイベント用に持ってきた八木アンテナに接続されたハンディ機にイヤホンを繋ぐ。

板垣「聞こえる聞こえる」

望月「朝利！ はやく！」

朝利「あー！ きたきたきたあー！」

池谷「なにしてんの？」

朝利「お前には、聞かせん」

池谷「はあ?!」

三人、耳を澄ませる。

望月「あー……」

朝利「ふふっ」

板垣「めっちゃ怒られてる」

池谷「ねえ」

望月「……伊藤だ。怒られてるのは」

朝利「伊藤」

板垣「伊藤、分電盤の上にステージ立てちゃったのか」

朝利「だっる」

望月「……しかし伊藤選手まったく動じない」

板垣「応答無しだよ」

朝利「メンタル鬼か」

朝利・板垣・望月「ふふふふふ……」

池谷「結局盗聴じゃん」

池谷、男性陣がまったく無視するので諦めて携帯を弄り始める。

板垣「ああもう頭領凄いい怒っちゃってるよ」

朝利「伊藤、謝っとけ」

望月「(カイジのナレーション風に)だが、伊藤、微動だにしない！」

板垣「日に三十時間の鍛錬という矛盾のみを条件に存在するメンタル！」

朝利「なにそれ」

板垣「グラップラー刃牙。知らない？」

朝利「しらねー(笑)」

望月「……いやこれ伊藤、インカム外してるな」

板垣「インカム意味ねえ！」

朝利、窓を開け大声で、

朝利「伊藤！ 謝れ！」

遠くから、「すみませんでした〜」という声。
朝利、満足して窓を閉める。

池谷「いや、無線いみなー」

朝利「嬉しそうに）何人かいつせいにバツてこっち見たんだけどアレ全員伊藤なのかな？」

池谷「あんたがいきなり大声出したからだよ」

板垣「いややっぱり血湧き肉躍るものあるな、これ」

池谷「前から不思議だったんだけどさ、無線の何が楽しいわけ？ スマホ一つで何でも調べられる時代にさあ」

望月「俺からすれば演劇部の方が謎だけどね」

池谷「はー？ 演劇は芸術だろうが」

朝利「(キリッとして) ネットの情報って言うのはさ、それを知りたいって人の所に届くワケじゃん。つまりはじめから約束された、相思相愛の情報なワケよ。でも本当に情報を伝えたい相手って誰だと思う？ それは、俺のことを知らない、俺が何を思っているか知らない、片思いの相手にこそ届けたいわけ。無線ってのは、誰がいるかもわからない真っ暗な海原で一人『だれかいませんか』って叫ぶところから始まるわけ。それに答えてくれる人ってのは、もともと俺の話なんか聞く気が無い相手なのよ。そういう人と繋がる快感。無線こそ、俺たちが本当に欲しているコミュニケーションツールなワケ」

望月「受け売りじゃん」

朝利「はははー」

板垣「ねえ、それリョウタのマネ？」

朝利「そういうワケ」

板垣「似てねー(笑) どっちかっていうと、ハローバイバイの関じゃん」

望月「(物まね)もう世界は新しい次元に移行し始めたってワケ。いい加減気付けてってこと」

朝利「めっちゃ似てる……」

池谷「え？ 似てた？ 今の似てた?!」

板垣、ヘッドホンを机に戻そうとしかけて、もぞもぞと瓦礫の山をさぐる。

板垣「あ、あ、あ、」

板垣、机の山の陰から、タバコの吸い殻がぎっしり詰まったペットボトルを取り出す。

板垣「あー……」。やなもんみつけちゃったこれ」

池谷「げえ……」

望月「今時いるんだ、タバコ吸う高校生」

板垣「どうします?」

池谷「いいよっ」

板垣「へ」

池谷「ほっとこ」

朝利「へー」

池谷「これ以上ごたごたに巻き込まれたくない」

池谷、朝利から空き缶を奪い取る。

と、横内とゆうきがやってくる。

池谷、慌ててタバコを隠す。

朝利も、横内に背を向ける。

横内「さ、先生どうぞ! こちらは元アマチュア無線部有志達による出店ブースでございます
す」

望月「ええ?!」

望月、一人驚いて後ずさる。

板垣「あ、お疲れ様です」

横内「どうも先生! お疲れ様でございます! 今回はご無理を言いました!」

板垣「いえいえいえ」

横内「池谷先生もお疲れ様です!」

池谷「あっどうも」

横内「(ゆうきに)先生、こちらが沖浦高校教諭の池谷先生と板垣先生です。今回はお二人
からのたつての希望で、サイエンス祭の重要なテーマである科学! 科学的教育展示で
あるところの無線体験会を企画していただいております」

ゆうき「へー!」

板垣「まあ、はい。そういうことになってます」

横内「で、あとは……」

板垣「OBです、二人とも、無線部の」

ゆうき「ああ」

横内「ぼっちゃん!」

朝利「あ……。おひさしぶりですー」

横内「(駆け寄り) こっちについたら連絡下さいって俺何度も言いましたよね?!」

朝利「そうだったけ?」

横内「いいましたよ!! (自分の携帯を出し) 電話も! ほらメールも! ラインだって

漫☆画太郎のスタンプ付きで送ったじゃないですか!

ゆうき「ぼっちゃん?」

池谷「あ、市長の息子さんなんです」

ゆうき「ああ」

横内「いや俺今回はいらつしやらないかと思って……。あっ! もうさっき前園社長帰っち

ゃいましたよ! どうします? いまからでも社長のご自宅にごあいさつに行かれます

か? 俺役所の車で来てるんで送りますよ?」

朝利「いいよもう、遅いし」

横内「だけど! 坊ちゃんを前園社長にちゃんと引き合わせるようにって俺朝利先生から

言われてるんですよ!」

朝利「そっちが勝手に決めたことでしょ」

板垣「なんか約束あった?」

朝利「いや別に?」

横内「ぼっちゃん!」

朝利「いやその坊ちゃんってのやめてー?」

横内「今春からぼっ……朝利さんがおつとめになる予定の会社社長にごあいさつに行かれ

るんです」

板垣「おまえこっちに戻ってくるの? やったー」

池谷「へー!」

板垣「え? でもさ、去年からお前アニメの専門学校入り直したんじゃないっけ」

朝利「やめちゃった」

板垣「またあ?」

朝利「思ったよりおもしろくなかった」

板垣「そういって、デザインの専門もやめちゃったじゃん。大学も中退したし」

横内「そんなぼっ……朝利さん、いよいよ定住ということで」

池谷「はーん。よかったんじゃない?」

ゆうき「あの……」

横内「はい?」

ゆうき「よかったら私も紹介……」

横内「ああっ! すみません!」

望月「ゆうき先生ですよね?」

ゆうき「あ、はい」

望月「わーーーーー!」

池谷「わっなんだ吃驚したあ!」

望月「ゆうきかおり先生ですよね! ラノベ作家の!」

板垣「あ！ ええ?!」
望月「俺、本全部持ってます！ 握手してもらってもいいですかあ?!」
ゆうき「あ、はい」
池谷「(こそっと) え、誰？」
望月「(握手にいたる前に)『異世界に行ったらドラゴンとスライムが助けを求めてきたので
ひとつ風呂浴びて魔王倒してきた』のゆうきかおり先生だよ！」
池谷「えっ……異世界、行かれたんですか……？」
望月「ちげえよ！ 愚図！」
池谷「愚図！」
望月「タイトルだよ！」
池谷「えっ長っ！ ていうかそれタイトルで落ちまで全部説明しちゃってますよね？」
板垣「ラノベのタイトルってAVぐらい長いから」
池谷「いやしらないけど」
望月「略して『ドラフロ』！ (握手して)泣きました……」
ゆうき「わーうれしー」
望月「えっ……なんでですか？」
横内「明日、朝利先生とトークセッションしていただくことになってて」
望月「えっ行きます！ 絶対見に行きますー！」
朝利「えっ、ミニFMは？ 一緒にやろうって言ったじゃん！」
望月「ごめん余裕無いわ」
朝利「(すごい睨む)」
ゆうき「あ、なんか凄い睨まれてる」
望月「やめろ！ 目を潰すぞ！」
朝利「ひいっ」
池谷「え、望月君てこんなだったっけ?!」
横内「あとは、次回作の取材ですよね？」
望月「取材?!」
横内「沖浦を舞台にしたアニメの原作書かれることになって」
ゆうき「いや書きません！ 違いますよ?!」
望月「(きいておらず) う……え……(倒れる)」
池谷「ええ?! ちょっと望月君！ 望月君!!」
望月「まじか……俺も沖浦帰ってこようかな……」
ゆうき「わ……どうしよう。(横内に)あの、アニメ原作とか書きませんか?!」

横内の携帯鳴る。

横内「はい横内です！ 朝利先生お疲れ様です！ あっいらしてますよ？ はい、はい。わかりました。あと坊ちゃんも来てました。(電話口で大声を出されて、携帯を耳から離す) はい。わかりました、勿論です！ ではのちほど。(電話切る) ゆうき先生。いま市長の朝利先生が学校に着かれたと言うことなんですけど、よろしければ一緒にごあいさつに行っていたらいい、そのまま明日のお打ち合わせが出来ればと思うんですが」

望月「あー……出来れば、もうちょっと彼らにおはなし聞きたいんですけど」

横内「あっ、取材。あ、そうですね、はいわかりました！ そしたら朝利先生には先に挨拶回りに言っていたらいい。あの、俺また声かけに戻りますんで」

横内、出て行くこうとするとそこに生島現れる。

生島「あっ」

池谷「生島先生」

横内「……」

生島「あ、思いがけず大人数で」

朝利と望月だけ、ギョツとしている。

横内「(板垣に耳打ち) あんま、変なこと喋らせないでくださいね」

板垣「あっ、ええ、はあ」

横内去る。

板垣「あの人、すっかりおぼさんの秘書気取りだね」

池谷「次期市長、狙ってたりして」

朝利「え……あ、うん……」

板垣「？」

生島、手持ちぶさたな感じで入室。

生島「あ、君たち来てたの。ひさしぶり」

望月「……さしぶりです」

朝利「あ、はい……どうも……」

生島「(気もそぞろで)……。ま、じゃ、あの、がんはってね」

生島、踵を返す。

板垣「あっ、生島先生」

生島「はい」

板垣「あの、これ……（ゆうきを気にしつつも）。ですよね？」

板垣、吸い殻の入ったペットボトルを、生島に差し出す。

生島「あっ、あははははは、うん、そう。ごめんね」

池谷「（呆れて）えええ」

板垣「ですよね！ これアイコスですよもんね！ かつこつけてタバコ吸う高校生が、アイコス吸わないですよもんね」

生島「はははは、そうそう、ごめんごめん。喫煙所が遠くてさ」

板垣「なあんだ、もう、よかったあ！ ってよくないですよっ。校内全面禁煙っ」

生島「はい。ね、じゃああの……。大変失礼いたしましたー」

生島、ゆうきにもなんとなく会釈し、去る。

板垣「（空き缶）持ってかねーのかよ」

池谷「ったくもー！ 心配して損したあ！」

朝利「びっくりしたあー！」

板垣「え？」

朝利「俺、生島先生死んだと思ってたからさあ」

望月「あ、俺も！ なあ？」

板垣と池谷、顔を見合わせる。

板垣「……なにをいうかね君たち」

朝利「え？ でもねえ？ 死んだよねえ」

望月「死んだ死んだ」

池谷「やめなさいよ」

朝利「三年ぐらい前に、ねえ？」

望月「そうそう」

朝利「病気かなんか」

望月「癌だっけ？」

朝利・望月「タバコの吸いすぎ！」

池谷「ちよっと、不謹慎！」

朝利「何と勘違いしてんだろ俺……」

ゆうき「マンデラエフェクトですネ」

望月「あっそうですよね！ マンデラエフェクト！」

朝利「なるほどねー」

池谷「なんそれ」

朝利「知らない」

ゆうき「ネルソン・マンデラって聞いたじゃないですか。南アフリカの民主化運動やった」

板垣「へー……それがマンデラエフェクトかあ」

ゆうき「いやちがう。これは、ただのネルソン・マンデラの話」

板垣「はあ」

ゆうき「ネルソン・マンデラって、ホントは二〇一三年に亡くなってただけど、かなり多くの人がネルソン・マンデラは一九八〇年代に死んだって思い込んでたって事件があったさ」

池谷「マンデラ可哀想じゃん」

ゆうき「実際の出来事とは異なる記憶を、複数人が持つ共通してもつ現象を、マンデラエフェクトっていうの」

朝利「あ、わかるー。俺も筑紫哲也が死んだとき、あゝ鳥越俊太郎死んだなって思ったもん」

ゆうき「それはただの人違い。実際に見たの初めて」

望月「さすがですね！ あの、作家先生って言うか」

ゆうき「ごめんなさい。それやめてください」

望月「え？」

ゆうき「先生って言われるの苦手なの」

望月「あ、はい」

ゆうき「ほら、先生先生って呼ばれてる人間って、大抵ろくでもないじゃない？」

板垣と池谷、顔を見合わせる。

望月「いや、ホントそうですよね」

板垣・池谷「……」

望月「あの、次回作の取材って、次はどんな作品なんですか？ やっぱりファンタジーです

か？ それか、SF。で、あの本当に沖浦が舞台になるんでしょうか」

ゆうき「うん、それは多分」

板垣「わーすげー……」

ゆうき「あ、でもアニメにはならないよ」

望月「え！」

ゆうき「ファンタジーでもSFでもなくて、ノンフィクション」

遠く、研究所のサイレンが聞こえる。

ゆうき、窓から沖島を臨む。

ゆうき「凄い盛り上げようだね。たかが研究所ひとつにき、町を挙げてのまさにお祭り騒ぎじゃない」

板垣「それはもう、研究所誘致は市民の悲願でしたから……」

ゆうき「ねえそれってホント？」

板垣「え？」

ゆうき「君たちっていくつ？ 君は？」

望月「25です」

ゆうき「あ、じゃあここ三人は同い年ね？ あなたも？」

池谷「私はひとつ上ですけど」

ゆうき「ちょうど研究所の建設が始まった頃、高校生だよ」

板垣「はい」

ゆうき「まだしがらみのない高校生だった君たちから見ても、あの研究所ってどういう存在だった？ やっぱり大人達と同じように喜んでた？」

板垣、望月、池谷、話しづらそう。

朝利「そんなことないですよ」

ゆうき「そう？」

朝利「反対してる人いました。研究所が出来れば、汚水も出るし水温も変わっちゃうから、もう漁は出来なくなるし、漁協組合の人とか結構反対してましたよ」

ゆうき「そうなんだ」

朝利「俺たちだって、ねえ？」

板垣「いいよ別にそんなこと言わなくて」

朝利「リョウタって言うのがいて、あ、俺らの友達なんですけど。めっちゃ正義感強くて。海が汚れるし。この辺の友達、結構家が漁師やってる奴も多かったから。リョウタが、俺たちで研究所建設をとめようって言って署名集めたり。あ、俺たち無線部じゃないですか。だからラジオで、あのミニFMって言うんですけど、ラジオを使って色んな人に自分たちの意見を伝えようとかしたり。ね！ なんか結構頑張ったよね！」

板垣「うん……」

ゆうき「へえ！一緒にやってたんだ」

朝利「はい」

ゆうき「でも君さ、朝利市長の息子さんだよな？」

朝利「……」

ゆうき「君が研究所建設に反対してることって、お母さん知ってた？」

朝利「……」

ゆうき「研究所誘致に一番積極的だったのってお母さんだよな？その成果が認められて

市長になったんでしょ？君が研究所建設に反対してること、お母さんはなんて思っ

たのかな？」

朝利「詳しいことはリョウタに聞いて下さい！」

ゆうき「え？」

朝利「研究所のこととかは、やっぱりリョウタが一番詳しくかったんで！うわーなんだよりヨ

ウタ、今日来ればなく。あいつめっちゃ喜んでゆうきさんに色々話すと思いますよ？」

ゆうき「そうかな」

朝利、無線機を弄って、あたふたとヘッドホンをつけたり外したりする。

朝利「あ、やっぱちよつと電波の飛び悪いな！雨だからかな？」

板垣「え、あ、わかんない」

朝利「俺ちよつとアンテナ見てくるわ。屋上の鍵借りていい？」

板垣「あ、はい」

朝利、板垣から鍵を受け取ると教室を飛び出していく。

ゆうき「どういうこと？」

板垣「……」

ゆうき「リョウタ君のことは私も調べたんだ。彼ってその、反対運動で」

望月「そうですね。ラジオで反対意見を放送するんだってって」

ゆうき「海に出たんだよな」

板垣「はい。その方が電波が遠くまで飛ばせるってって」

ゆうき「そこで嵐に遭って……その……リョウタ君、亡くなってるんだよな？」

遠くで雷鳴。

研究所のサイレンが鳴り響く。

○3、屋上／校庭

強い風と雨。

サイレン鳴り響く中、朝利、屋上にやってきてアンテナを見上げる。

朝利「……」

と、校庭に雨だれの落ちる傘を差した祐子、しずしずと現れて、わざわざ傘を閉じると深々と一礼。

祐子、大仰な作業服姿に、ヘルメットまで被っている。

首には青いスカーフ。

祐子「皆様、本日はあいにくのお天気で、風も冷たく、またこのような時間に、沖浦市沖島アジア高エネルギー加速器実験機構開業記念サイエンス祭のため、多大なるご尽力を賜り、ほんとうにありがとうございます！ 地方の小規模漁村であったこの沖浦市は長年にわたる漁獲高の減少それに伴う人口流出により、経済的にも、また文化的にも貧しく苦しい時を堪え忍んできました。ですが、私たちの町は生まれ変わりました！ 研究所誘致によって就労人口は著しく増え、人の出入りが多くなったことで商店街は活気を増し、また各国からいらっしゃる著名な研究者の皆様達のおかげで、文化的にも教育的にも豊かな町になりました。これもひとえに、皆様の温かいご支援によるものです。これからも手を取り合って、沖浦市をサイエンスの風薫る一流都市にしていきましょう！」

祐子、にこやかに手を振る。

そんな祐子を、傘を差した生島がじっと見つめている。

生島「……」

祐子「生島先生。まだいらっしゃったんですか」

生島「まあ、生徒がまだ校内に残ってますもんで……」

祐子「いえそうではなくて。まだ教職を続けてらっしゃるんだなあとおもって」

生島「定年にはまだ早いものですから」

祐子「どうでしょう？ なじまない土地でなじまないご職業続けてらっしゃるくらいなら、新天地で第二の人生を探された方がいいんじゃないかと思って。ほら、スタートって遅すぎるってことはあっても、早すぎるってことないでしょう？」

生島「お気遣いありがとうございます。でも、タイミングは自分で決めますから」

祐子「……」

生島、去る。

横内が駆け寄ってくる。

横内「朝利せんせい！」

横内、祐子の傘を差してやる。

祐子、屋上を見上げる。

朝利、ビクツとして駆け去る。

○4、無線部部室

祐子、横内引き続き板付き。

板垣、望月、池谷、ゆうきが再度出てきて、

祐子「先生！ この度はご足労いただきましてありがとうございます！ 明日はよろしく

お願いします！」

ゆうき「あ、はい、どうも」

祐子「沖浦が舞台のアニメ！ 楽しみにしています」

ゆうき「え?! (横内に) ちょっと！ 困りますよ」

横内「はい？」

祐子「まあ、本当に夜の学校の雰囲気って、ワクワクしますわよねえ？」

祐子、大きく息を吸い込むがむせる。

横内「大丈夫ですか?!」

祐子「すみません今ちょっとこの辺ほこりが！」

横内、あわてて祐子の周りを、手に持っていた書類であおぐ。

祐子「大丈夫大丈夫。懐かしい空気！ やっぱりこういうのを肌で感じるって言うのが、創

作の上で重要なんですよね？」

ゆうき「ええまあそれは」

祐子「今回は取材もかねていらっしやっただけでしょう？ 何でも聞いて下さいね？」

ゆうき「あっ、じゃあ早速なんですけど、素粒子衝突実験の危険性について……」

祐子「(聞いてない) 池谷先生! この度はどうも」

池谷「ああっはい」

祐子「板垣君もすっかり先生らしくなっちゃって。望月君?! まあ、見違えちゃって!」

望月「そうですか?」

祐子「だって最後に会ったときは学ラン着てたから。(キョロキョロして) 圭一は?」

ゆうき「パワフルな方ですね」

横内「沖浦のブルドーザーって呼ばれてるんですよ」

祐子「ちよっと横内さんっ、先生におかしなこと言わないで。圭一來てるんですよ」

横内「あっええ、確かに」

板垣「ちよっといま上にアンテナ見に行つて」

祐子「ああ……そう」

横内「もしあれなら俺呼んできましたよ? その間少しでも(ゆうきと)お話しなんか」

ゆうき「すみません、質問よろしいですか?」

祐子「ああ、そうでしたね。すみません慌ただしい性格で」

祐子、自分の分だけ椅子を引っ張り出してきて座る。

横内「あ、ここで始めます? 一応応接室借りてるんですけど」

祐子「あ、そうなの?」

ゆうき「大丈夫ですよ、ここで」

横内「あ、そうですか?」

板垣「あの……俺たちここで作業しても大丈夫ですか?」

祐子「悪いけど、邪魔にならない程度にしてくれる?」

板垣「あ……はい」

祐子「それで、どういったことがお知りになりたいんですか?」

ゆうき「まずは研究所をめぐる環境問題とか……」

望月「どうする?」

板垣「とりあえず発信器設置しに行こうか」

望月「え? まだどこに置くか決まってないのに? じゃあもうトイレでいいか」

池谷「ダメだって」

祐子「(咳払い)」

板垣「……いこいこいこいこ」

板垣、望月、池谷、いそいそと機材を集め始める。

この間、横内はゆうきにいくつかの資料を渡したりしている。

祐子「環境問題ですか？」

ゆうき「はい、汚泥や排水による環境汚染や、粒子衝突実験そのものの危険性について住民の皆さんとどのように折衝されたかっていう……」

朝利、やってきて祐子の姿を見ると「げっ」と踵を返すが、

祐子「圭ちゃん！」

朝利「(観念して)……」

祐子「帰ってきたら連絡しなさいって言ったのに。(ゆうきに)ごめんさいね」
ゆうき「あ、いえ」

朝利「アンテナ特に問題なかったよ」

板垣「あーサンキュ……」

朝利「やっぱりこの天気がまずいのかな」

朝利、祐子にはかまわず無線機に向かう。

祐子「圭ちゃん」

朝利「……」

横内「あのー、やっぱり応接室に移動しましょうか？」
ゆうき「大丈夫ですよ、ここで」

祐子「圭ちゃん、駅からどうしたの？ 歩いてきたの？ 荷物あれだったら横内さんに渡して？ 家まで届けてもらうから」

横内「あっ、はいはい、届けますよ」

祐子「この前ね圭ちゃんにお願いされたMacBookPro、送ったんだけど届いた？」

朝利「うん」

祐子「だったら連絡ぐらい寄越しなさいよ。ネットで注文？ するのよくわかんなくてお母さん凄く心配だったんだから」

朝利「どうせ横内さんにやらせたんでしょ？」

祐子「(悪びれず)うんそう」

朝利「なにそのかっこ」

祐子「だってお母さんも皆様のお手伝いしたいんだもん」

朝利「小池百合子じゃん。意識してるのバレバレだから」

祐子「お母さんの方が先に始めたんです！（スカート示し）ほら、祐子ブルー」

朝利「（一瞥くれて）……」

池谷「(気を遣って)あっはっはっはっ！」

祐子「……」

池谷「すみません」

朝利「恥ずかしい」

祐子「なにいつてるの。ね、今日は前園社長にちゃんと挨拶してって、お母さん言ったよね」

朝利「……」

祐子「お母さんが社長にどれだけお願いしたか、圭ちゃんわかってるの？」

池谷「あく朝利君、私たち先に発信器置きに行ってくるね」

朝利「えくなんで？ 俺も行く」

池谷「馬鹿たれ……」

祐子「ああそうだ望月君」

望月「ええ？ はい」

祐子「望月君はたしか京都の大学に行ったのよね」

望月「はあ」

祐子「それで？ 今は何してるの？」

望月「大学に残って研究職をちょっと」

祐子「わあすごい！ 板垣君は学校の先生だし。みんなすごいわねえ、圭ちゃん」

朝利「……」

朝利、ヘッドホンつける。

祐子、外す。

つける外すつける外す繰り返し、祐子、朝利からヘッドホンもぎ取る。

池谷「あつ、なんか朝利君もこっちで就職決まったみたいですね！」

板垣「ああそうそう」

池谷「私たちもねーさつきそれでよかったねーって話してて」

板垣「そうそうそうそう」

池谷「この辺の友達、みんな東京に行っちゃうから」

板垣「朝利が戻ってきたら楽しくなるなあ、なんてね」

池谷「ねえ！」

朝利「戻ってこないよ、俺」

祐子「ん？ なあに？」

横内「朝利先生、あの、そろそろ」

祐子「ああはい」

横内「ゆうき先生もいらっしやってますし」

祐子「そうね、ごめんなさいね」

ゆうき「お気になさらず」

朝利「(立ち上がる)俺、みんなに言いたいことがある」
板垣「な、なんだよ……」
朝利「俺は、YouTuberになる！」

望月、吹き出す。

板垣「(望月に)おいっ！」

祐子「……圭ちゃん!!」

朝利「ようやく、本当にやりたいことに出会えた気がするんだ」

祐子「(あきれ果て) あんたは……あんたは……何言ってるのあんたは！」

横内「(ゆうきに) 先生やっぱり応接室に」

ゆうき「大丈夫ですよ」

横内「お願いですから！」

朝利「俺やっぱり、ただ働いただけじゃなくて、何かを作り出す仕事をしたんだ」

朝利、そう言いながらスマホで動画を撮り出す。

朝利『母親に、YouTubeになりたいって言ってみた結果』どうでしょう、これが俺の母親
の反応です(祐子にカメラを向ける)

祐子「動画を撮るのをやめなさい！」

朝利「大学とか、デザインとか、アニメとかみたいに生半可な気持ちで始めるんじゃない
だ。今度こそ絶対にやめないから(動画撮りながら)」

祐子「やめなさい!!!!!!」

朝利「俺は、HIKAKIN みたいになる」

祐子「お母さんあんたを HIKAKIN みたいにするために MacBookPro 買ってあげたんじゃ
ないッ!!!!!!」

朝利「好きに使いなさいって言ったじゃん」

祐子「そういう意味じゃない」

朝利「(当然のように) やっぱり、親のコネで就職とか、そういうのはよくないと思って」
祐子「さんざん親のスネ嚙っついて何いってるの!!」

横内「先生っ! 落ち着いてください。ゆうき先生もいらしてますので」

祐子「わかっている……(少し落ち着いて)」

板垣「あの! やっぱり俺たちちょっと出てるんで!」

朝利「ダメだよ! 二人もメンバーなんだから」

板垣・望月「ええ?」

朝利「ちよっとちよっとこっち」

朝利、板垣と望月とカメラに収まり、

朝利「どうもー！ 青春デストロイヤーです！」

板垣「いややめて?!」

望月「いくらなんでもダサすぎるだろ！」

朝利「池谷先輩も、編集スタツフとしてなら入っていいよ」

池谷「ああ……ありがと……」

祐子「なんで……あんたは……あんたはもう……」

祐子、座る。

朝利「リョウタだって、こっちの方がいいっていうと思う」

祐子「……」

横内「ゆうき先生、もうこの辺で」

ゆうき「いやあのうちちょっとだけ……」

横内「プライベートな問題ですから。明日気ますぐくなりますよ?!」

ゆうき「まままま……」

祐子「……まだそんなこと言ってるの……」

朝利「え? なんで?」

祐子「何回言ったらわかるの……リョウタくんはね、いないの」

朝利「……何言ってるの(笑)」

朝利、無線機の前に座りヘッドホンをつける。

祐子「こっち向きなさい、圭」

朝利「(無線機をつまみ弄りながら) ちょっとマニアックなバンドも聞いてみよっか」

望月「いやいいよ今は……」

祐子「後回しにしたって、なんにも解決しないの、わかるよね?」

朝利「ちよっとまって……」

祐子「そういうところ、お父さんそっくり……」

朝利「……? (何かの電波を拾う) ちよっと二人とも来て! 早く来て!!」

板垣「ええ?」

祐子「今お母さんが話してるでしょ!!!」

祐子、無線機からヘッドホンのコードを引き抜く。

大音量で雑音が流れる。

ノイズ中から微かに、冲高FMのジングルが聞こえてくる。

リョウタ（音声）「えっふえむ。おーきうらこうこう。88メガヘルツ。俺たちの言
葉伝える。青春は行き過ぎる光ではない。遠き今日も輝き続ける。めあて星」

研究所のサイレンが鳴り響く。

朝利、驚きのあまり大きく後ずさり尻餅つく。

板垣、望月も呆然とジングルを聞いている。

祐子「朝利の様子に驚いて）なに……？ 圭ちゃん、大丈夫？」

朝利「呆然としたまま」

池谷「ん？ なにこれ？ なにか流してるの？」

望月「や、ちがう……」

そのうちノイズが多くなり、ジングル消えていく。

板垣、慌てて無線機に齧り付きつまみを色々弄る。

池谷「ちょっと、なに」

板垣「あ、ダメだ……消える……」

ジングル、完全に消えノイズが残るだけ。

朝利、板垣、望月、呆然としたまま。

朝利、無線機に駆け寄りヘッドホンを繋ぎ直すと板垣を退けて無線機を弄り始める。

望月も無線機に駆け寄り、三人でヘッドホンに耳をそばだてる。

祐子「……。池谷先生ちょっと」

池谷「えッ！ はい！」

舞台反転。

朝利、板垣、望月、無線機の乗った机ごと素早く舞台全方へ。

同タイミングで、祐子、横内、池谷は先ほどまで無線機があった場所へ。

境界線にカーテン（紗幕の役割）が引かれる。

以下、カットバックしながらシーンが続く。

板垣「なんか聞こえた？」

朝利・望月「いや」

板垣「どういうこと……?」

朝利「周波数は88にあったた」

望月「俺たちが使ってた周波数だ」

朝利「念のため前後にも合わせてみたけど、今は何も聞こえない」

板垣「なんでジングルが」

望月「あの時の音源、とってあったっけ」

板垣「とってあったけど、なんでわざわざ電波に乗せるの」

望月「なんかした?」

朝利・板垣「してない」

板垣「なんかするってたって何するの」

望月「予約再生?」

板垣「なんのために」

望月「番組の再開を祈った俺たちのリスナーが」

板垣「いねーよそんなやつ」

望月「じゃあ誰がなんのために……」

朝利「音源じゃないよ」

板垣「え?」

朝利「さっきのジングル、一人だった。ジングルは、いつも俺たち四人で歌ってたじゃん」

×××

祐子「どうです? あの子」

池谷「へ?」

祐子「圭一です。先生から見ても」

池谷「どうって……」

祐子「様子がおかしいとか」

池谷「おかしいのは、いつもだいたいおかしいですけど」

祐子「もう何年もあんな感じなんです。学校も、仕事も、何をやらせても碌に続かなくて」

池谷「いまどき、珍しいことじゃないと思いますよ?」

祐子「なにかっていうと……」

×××

朝利「リョウタでしょ」

板垣「(あえて明るく) なに言ってるの」

朝利「それ以外考えられない？」
望月「それだけは考えられないね」

×××

祐子「リョウタ君のことばかり。可哀想だっと思ってているんです、私も。仲のいいお友だちだったでしょ？ だけど先生だって、板垣君だって望月君だってもう立派に大人になってるのに……。いつまでも可哀想ってだけで、通用しないでしょ？」

池谷「そう、ですね」

祐子「先生今日はまだ学校？」

池谷「明日の準備がありますから」

祐子「お手数ですけど、何かあったら私に連絡して下さいます？」

池谷「え？」

祐子「明日は楽しいお祭りでしょ？ 皆さんに迷惑がかかるといけないから。じゃあお願いしますね」

池谷「え、あの！ 連絡って、すみません何をどう連絡」

祐子「圭一です」

池谷「はあ」

祐子「先生これはここだけの話に留めておいていただきたいんですけど」

横内、わざとらしく背を向ける。

祐子「圭一にはね、ずっと通わせてるんです、あの……」

池谷「はい」

祐子「カウンセラー」

池谷「え？」

祐子「心理の、心の、精神のカウンセラー」

池谷「ええはい」

祐子「メンタルの」

池谷「わかります」

祐子「ああでも違うの。圭一は病気とかじゃないの、狂ってるとか、白痴とか」

池谷「白痴って……」

祐子「そういうんじゃないんだけど圭一は」

池谷「はい」

祐子「でも病気かもしれない」

池谷「……」

祐子「私は、母親として、決断しないとイケないのかもしれない。だから、ね。何かあったら」

池谷「……そんなに、気にしなくても大丈夫ですよ、朝利君は」

祐子「大変ですか？ いじめのあるクラスって」

池谷「え？」

祐子「先生がお若いから、馬鹿にされちゃうのね、きっと」

池谷「……」

祐子「教育委員会に私の方から相談してみましようか？ 来年の受け持ちクラスについて」

池谷「……お願いします」

祐子「よかった。役に立てて。こちらこそ、お願いいたします」

池谷「はい」

祐子「私、まだ、あの子のこと諦めたくないんです」

カットバックここまで。

再び舞台反転、定位置へ。

ゆうきはずっと、朝利達を注視している。

祐子「先生？ ゆうき先生」

ゆうき「ああなたなんだ私か！ はい」

祐子「ごめんさい、なんだかお恥ずかしいところを」

ゆうき「ああいえ、ご家族のことは、ね？」

祐子「続きはやっぱり応接室でやりましょうか」

ゆうき「あっいえ、大丈夫です」

祐子「はい？」

ゆうき「なんだか私も無縁に興味がわいちゃって。今日は彼らの取材に切り替えようかなー
って」

横内「えっ！ 取材の続きは」

ゆうき「明日でもいいですか？」

横内「でもトークショーの打ち合わせとか」

ゆうき「やります？ 打ち合わせ」

横内「はい？」

ゆうき「ライブ感、なくなりませんか？」

横内「えっ。でも先生が事前に打ち合わせがしたいっておっしゃるから俺」

ゆうき「ダメですかね？」

横内「でも重要なイベントですし」

ゆうき「ええー、なんかつまんないなうそういうの。やる気なくなるな。帰ろうかな」

横内「そんなあ！」

祐子「結構ですよ」

横内「え？」

祐子「打ち合わせ無しで。たしかにその方が楽しそうですね！」

ゆうき「ですよね！」

祐子「ただ、明日取材にお答えする時間が取れるかどうかはお約束できませんよ？」

ゆうき「それはそれで。なんならトークショーと兼ねちゃってもいいかなーなんて」

祐子「楽しいお話しで、お願いしますね」

ゆうき「そりゃ勿論！」

祐子「横内さん、今日はあとどなたが来てるの？」

横内「商工会の林さんと町会長が」

祐子「じゃあ、ご挨拶に行くって連絡して」

横内「あっはい」

祐子「ああ、さっきのご質問だけ、お答えしておきますね」

ゆうき「あれ、なにお聞きしましたっけ？ すみませんちよっといういですか……（わたわた

メモを開く）」

祐子「研究所の建設は環境に配慮して行われており、周囲の生態系に影響は及ぼしません。

漁協を含めた周辺住民の皆様には補償金額も含めて全てご納得いただいております、むしろ

町全体として喜んで研究所を迎え入れております。素粒子衝突実験の危険性については、

ほとんどオカルトで、検討の余地もないトピックですね」

ゆうき「あーはい」

祐子「お泊まりはどちらで？ 横内に送らせますよ」

横内「はい、お送りします」

ゆうき「迎えば宿に頼みます」

祐子「そうですか。池谷先生」

池谷「はいっ！」

祐子「ゆうき先生のこと、お願いしていいですか？」

池谷「はあ……」

祐子「ゆうき先生に沖浦の素晴らしさがちゃんと伝わるように、アテンドしてください」

池谷「あっはい！ 勿論です！」

祐子「圭ちゃん。帰るときは横内さんに送ってもらって」

横内「はい。お送りします」

祐子、朝利が反応しないので、近づいて朝利のヘッドホンを外す。

祐子「おうちで、ちゃんと話そうね」

朝利「……」

祐子「(去りつつ)横内さん」

横内「はいっ」

祐子「明日の会場の警備、増やすように手配してくれる？」

横内「はいっ！ え？ 何ですか？」

祐子、横内を伴って去る。

○5、無線部部室

ゆうき、朝利達に駆け寄る。

ゆうき「さっきの何？」

板垣「え？」

ゆうき「なんか変なの流れてきたじゃん！」

望月「いや、俺たちにもよく……」

朝利「だからリョウタだって！」

板垣「うーんと」

望月「あのさあ……」

朝利、喋りながら荷物からハンディトランシーバーを取り出す。

朝利「さっき言ったじゃないですか。リョウタっていうのがいて、四人でラジオ番組作ってたって。さっきの、そのジングルなんですよ(板垣にトランシーバーを渡し)ちょっとこれでアレして」

板垣「え？ なに」

朝利「430のメインでリョウタ呼び出してみてよ。俺、144のメインで呼び出してみるからさ」

板垣「あ、ああ……」

朝利「多分簡単には答ええないと思うけど。(ゆうきに)で、そのリョウタってのが、まあ全然連絡取れないヤツで、ずっと音信不通だったんですけど。あれ、さっきの、ジングル。アレが聞こえてきたってことは、この近くでリョウタがラジオ放送してるってことなんですよ！」

ゆうき「そういうことなの？」

朝利「望月もさ、頼むよ」

望月「ええ？」

朝利「ハンディ持ってないの？」

望月「持ってないよ」

朝利「なんだよ（舌打ち）」

望月「いや舌打ちって」

朝利「宝探し用の八木アンテナっていくつ借りたんだっけ？」

望月「確か5個だけど」

朝利「じゃあ、とりあえずあと2個組み立てて」

望月「うん」

朝利「リヨウタが使ってそうな周波数一通り呼び出したら、俺八木アンテナ持って旧校舎の
ほう行くから」

池谷「え、ちょっととちょっととちょっとと、何する気？」

朝利「リヨウタの居場所を突き止める」

池谷「ええー」

池谷、板垣と望月の顔色をうかがう。

朝利「（ゆうきに）あいつも回りくどいことするっていうか。（板垣、望月に）まあそういう
ところある、リヨウタは（嬉しそうに）」

ゆうき「居場所を突き止めるって、そんなことできるの？」

朝利「これは、ゲームなんです。リヨウタがしかけたゲーム」

ゆうき「ゲーム？」

朝利「えっと（説明しようとするが）いや、めんどくさい」

ゆうき「ええっ。ちょっと」

朝利「板垣っ早く（リヨウタの呼び出しを）」

板垣「ああ、うん（ハンディを弄る）」

朝利「リヨウタのコールサイン、覚えてるよね」

朝利・板垣・望月「JE2FAO」

朝利「はいおっけー！ じゃあちょっと、頑張ろうー！（無線に語りかけ始める）JE2FAO、

JE2FAO、いざいざJE2YPN、どうぞ。……JE2FAO、JE2FAO、いませんかー？ ござい

JE2YPN、どうぞ……（以下、周波数を変えながら続ける）」

池谷「ちょっと、板垣」

板垣「えーあーうん……」

ゆうき「ちょっと、私に誰か説明してー。迷子です！ 私、いま迷子です！」

望月「ああ、すみませんっ」

ゆうき「ああ、よかった。ちょっとお願いしていい？」

望月「アマチュア無線のジャンルのひとつに、宝探しゲームってのがあって」

ゆうき「はあ」

望月「フォックスハンティングって言うんですけど、朝利は、まあ、それをしようっていう」

ゆうき「うん？」

望月「ある一定の電波を出し続けるこういう（手に持って）発信器を、指向性のあるアンテ

ナを使って探し出すんです」

ゆうき「ほほう」

望月「（アンテナで周囲を探索し）こうやってやると……、発信器のある方角から音が強く

聞こえるわけですよ」

ゆうき「はいはい」

望月「この原理を利用すると」

ゆうき「はい」

望月「例えば、ここからだあっちの方向から（指さし）電波を受信して」

ゆうき「はいはい」

望月「向こうからは（板垣のところ）この方向から電場を受信したとしますよね」

ゆうき「はいはいはいはい」

板垣、電波の方向を指さす。

望月「そうすると、このラインの交わるところに……？」

ゆうき「はいはいはいはいはい！」

望月「……（答えを期待）」

ゆうき「……はい？」

望月「リョウタがいるっていうことです！」

ゆうき「はー！なるほど！すごい！」

望月「わかりました？」

ゆうき「わからない！！！」

望月「ええ？」

ゆうき「ごめんなさい！無理なのよお！私立文系一本でやってきた私には無理な

のよお！高二の時点で理数系科目全部捨てた私には無理なのよ！」

望月「ええ！と、どうしますかね……」

ゆうき「いや、あらまはね。あらまはわかった。……ダメだ。頭痛い（座る）」

望月「大丈夫ですか？」

ゆうき「いやだって、そもそも、リョウタ君ってさあ」

朝利「（無線機に向かって）リョウタ！そこにいるのはわかってる！大人しく出てきな

さい!

望月「……」

池谷「ちょっと、このまま朝利君に付き合うつもり？ 明日の準備は？」

板垣「大丈夫。ちゃんとやるよ」

朝利「ダメだ。やっぱり素直には応えないな。板垣のほうは？」

板垣「(実際はやっていないが) ちょっとダメみたいだな」

朝利「くっそー……。やっぱりラジオの電波を拾うしかないか……」

朝利、無線機の周波数を88メガヘルツに合わせ、スピーカーに切り替え。

八木アンテナを持って出ていこうとする。

池谷「えっ、朝利君どこ行くの?!」

朝利「だからー、旧校舎だって。校内だったらこの部屋が一番西。旧校舎のはじが一番東で

しょ？ 板垣と望月さ」

板垣「おう」

朝利「その無線機、さっきジングルが聞こえた周波数に合わせてあるからさ、また電波が入ったら」

板垣「うん、電波の方向確認しとく」

朝利「よろしく」

朝利、出て行きかけて、

朝利「リョウタに会えたらさ、どうする?」

板垣「え……」

朝利「やっぱさ、ラジオやらない? 冲高FM復活! 定期的に四人で集まってさ。それこ

そYouTubeで配信して……。あ、だめか、リョウタのことだからネット配信は邪道とか言
い出すかな」

板垣「どうだろ」

朝利「したら四人でデカイアンテナ買う? それかアンプ! そんで放送範囲、東京ぐら
いまで拡大してさ、メール募集してネタ投稿コーナー作って……。うわやば、めっちゃテン
ション上がってきた。人気出ちゃったらどうしよう……。ラジオ局にスカウトされたりし
て。リスナーに待ちとかされたらどうしよう! 差し入れに生ものももらった場合って
受け取らないほうがいいの? それとも受け取ってあとで廃棄したほうがいいの?」

板垣「いやわかんないけど」

望月「いまそれ心配しなくていいだろ」

朝利「あ、そうか……。それもそうだね。じゃあ俺行ってくるから」

望月「はいよ」

朝利「ちゃんと方向確認してよ！」

板垣「わかったよ」

朝利、嬉々として出かけていく。

池谷「あゝ……いっちゃったよ……どうする？……（追うべきか否か）」
板垣「なに」

池谷「だって、朝利君いっちゃったよ？ リョウタ探しに」

板垣「いいじゃない、行かせれば」

望月「何が見つかるってワケでもないし」

池谷「でも私……朝利君を……朝利君が」

板垣「なに、どうしたの（笑）」

池谷「やっぱ様子見とくわ！ 心配だから！」

池谷、走って出て行く。

板垣「なんだあれ……」

望月「好きなんじゃない？」

板垣「……（しばし考え込んで）ええっ?!」

板垣・望月「ないないないないないない」

板垣「（しかし気になって）……え……」

望月「で、結局どうする？」

板垣「へ？」

望月「発信機さ、どこ置くのよ」

板垣「あ……ま、無難に校庭かな」

望月「つまんねーの〜」

板垣、望月、校庭を見て、

板垣「あの辺の植え込み？」

望月「ありがちですなあ」

ゆうき「いいの？」

板垣「へ？」

ゆうき「リョウタ君探さなくて」

板垣「ああ」

望月「探さないですよ。絶対に見つからないもん」

ゆうき「だけどさ、さっきのジングル」

望月「なんかの聞き間違いか……いたずらですよ」

ゆうき「いたずらって、なんのために」

望月「いやそれは……わからないですけど」

板垣「イタズラだとしたら、たち悪いよなあ……。はあっ……なんかドツと疲れたく……」

望月「これ（発信器）ホントに明日までに間に合うのかね」

板垣「まにあわさんとなあ……」

望月「地方公務員は辛いね」

板垣・望月、座る。

ゆうき「なんで二人はさ……言わないの？」

板垣「……」

ゆうき「朝利君に。リョウタ君は死んだって」

板垣「うー……ん……気になります？」

ゆうき「そりゃ気になるでしょ。私ね、取材に来てるんだよ？」

望月「えっじゃあ俺たち小説に出てきます？」

ゆうき「それは話を聞いてみないとわかんないけど」

望月「あ、じゃあだめだ」

ゆうき「なんで」

望月「あんまり楽しい話じゃないんで。ゆうき先生の」

ゆうき「あ、こら」

望月「ゆうきさんの作風に作風にあわないうっていうか」

ゆうき「そうなの？」

望月「あと、正直あまり書いて欲しくないというか。ま、友達のことなんで」

板垣、黙って窓の外を見ている。

遠く、校内放送が聞こえてくる。

校内放送「サイエンス祭実行委員会からお知らせです。まもなく十時になります。女子生徒は下校して下さい。繰り返しします……」

ゆうき「わかった。じゃあこれはオフレコにする」

望月「オフレコって、なんか響きがかっこいいっすよね」

ゆうき「いいから（笑）」

望月「ああ、はい。そうですね……」

板垣「なんつーかね……。タイミングがわかんなくて……」

ゆうき「タイミング」

望月「リヨウタの死体って、見つかってないんですよ。沖合に、ひっくり返った漁船が浮かんでたっただけで。まあ、リヨウタの使ってた無線機とか、そういうのは見つかったんで、間違いないってことにはなったんですけど。……見つかってないから、リヨウタが。そうなるよ、どうも」

板垣「葬式もなー」

望月「なー」

板垣「やってないんで」

ゆうき「そうなんだ」

板垣「だから、朝利の中では、リヨウタは、いまだ搜索中なんす。それを、どういうタイミングで切ればいいのかっていうのが、まあ、わからずじまいついていうか。ね？」

望月「まあそういう話なんですよ。地味でしょ」

ゆうき「君たちはどうなの」

板垣「ああ、リヨウタですか？」

望月「……」

板垣「あの、理解してますよ。ちゃんと」

望月「まあ。さすがに」

ゆうき「なんで朝利君だけなのかな」

望月「はい？」

ゆうき「リヨウタ君に、特別に固執してるじゃない？」

望月「んー……。なんてゆーんですかねー……」

板垣「似てたからじゃないですかね」

ゆうき「ん？」

板垣「朝利んちの親、離婚してて。で、リヨウタんちもそうだったから」

ゆうき「……」

板垣「ほら、たまに家の話とかするじゃないですか。親への文句とかそういう。なんか、そういう話してる時俺たち（板垣と望月）とは違うノリつつうか、空気みたいなのが朝利とリヨウタにはあって……。前に俺が、親の喧嘩の話して。まあ普通に笑い話なんですよ？ 犬も食わない、的なの。やそれで普通にウケるかなと思って話したらなんか二人とも顔が無で。『無』ってなってる（笑）」

望月「あくあったな（笑）」

板垣「いやそこは笑って？ みたいな。俺がすべった感じになるじゃん、てか俺の親がスベってるじゃんってなって」

望月「いや結局笑ったんですけどね、二人とも」

板垣「でもなんかわりと、そういう感じ。そういうところ？ なんか入ってけない感じがした」

望月「あー……」

板垣「俺たち四人で仲良くやってたけど、そういうときはなんかこう、壁？ って言うんですかね、ある感じしてたんで。たぶん、朝利にとってはリヨウタって特別だったんじゃないかって思うのはあります」

ゆうき「そうなんだ」

板垣「でも別に、俺らがリヨウタに固執してないってわけじゃないですよ」

ゆうき「あ、そうだよ、ごめん」

板垣「ああ、いえ、全然」

ゆうき「……リヨウタ君って、どんな子だった？」

望月「変なヤツでしたよ！ なあ？」

板垣「うん（笑）」

望月「なんかいつも、あいつの中に流行の設定？ みたいなヤツがあって」

板垣「なんか一度、裸足で登下校するのがマイブームになったときあって」

望月「あったあった」

板垣「男の強さは足の皮の厚さに比例するとかいいだして」

望月「足の裏を鍛えるとかいって」

板垣「俺、あん時踏んだガラスの破片、まだ足の裏に入ってるよ」

望月「まじ？」

ゆうき「あ、一緒にやったんだ」

板垣「そりゃやるでしょ」

望月「四人でおそろいのカラコンつけようって言い出したこともあって。赤い」

ゆうき「赤い！」

板垣「みんなして凄い結膜炎になって」

ゆうき「君らもそうとうあれだよ」

望月「リヨウタが何でも誘ってくるんですよ」

板垣「そうそう。無線部もそうだし」

望月「世界を救うには君たちの力が必要だ、とかいわれて」

板垣「無線部でなにするっつーんだよなあ」

望月「学年でも最強のメンバーをあつめたって」

板垣「俺ら、どちらかというと学年でも最弱のほうだったんすけどね。ポツチでオタクだったし」

たし

望月「まあ普通に他の連中には断られたんじゃない？」

板垣「あの設定はなくなっちゃったのかな」

望月「なんだよそれ！ とか思って」

板垣「まあ結局入部したんですけど」

ゆうき「いや凄いつきあいいいよね、君たち」

板垣「だからね、俺たちもしかしたら、死んでたかもしれないっす」
ゆうき「ん？」

板垣「誘われてたんですよ、あの日も。海に」
ゆうき「……」

板垣「一緒に、研究所建設を阻止しようって。だけど、その誘いには乗れなかったです。
うちはもう、金もらっちゃってたし」

望月「まあ、そうですね」

板垣「朝利んちは、当然無理だし」

ゆうき「そっか」

板垣「そういうのも、なんかあるんですかね。いま一步、リョウタのことには踏み込めな
いっていう。もしあの時一緒に行ってたらって、考えるじゃないですか、やっぱ」

ゆうき「リョウタ君は、なんでそんなに研究所建設に反対してたのかな？」

板垣「なんですかね」

望月「まあ、世界を救う活動の一環だったんじゃないですか？（笑）」

ゆうき「あのさ、君たちはさ、リョウタ君が殺されたのかも知れないって、考えたことな
い？」

○6、校庭／旧校舎／無線部部室

祐子と横内、傘を差して現れる。

祐子「どうもお疲れ様でした！ 明日もよろしく願います」

横内「お願いいたします！ お疲れ様でございましたー！」

祐子「（見送りきって） あとは？ 町会長だったっけ？」

横内「あ、はい。あの……」

祐子「なあに？」

横内「会場の警備、ホントに増やすんですか？ いまからの手配だとさすがに」

祐子「増やしなさい」

横内「えっと……どうして」

祐子「気になるの。聞いたでしよさっきの。無線から流れてきた」

横内「ああ、あの変なラジオみたいな」

祐子「横内さんはアレ、聞いたことある？」

横内「えっ？ あれ、前から流れてたんですか？」

祐子「随分前に、いつときね。圭一達が趣味でやってたラジオ番組」

横内「あ〜！ そうなんですか！ なるほど！」

祐子「知ってるでしょ？ あの子達、一時期反対運動にかぶれてたの」

横内「まあ……はは」

祐子「心配なの」

横内「いや、でもさすがに今更……。ほら、ああいうのって若いとき特有の、熱風邪みたい

なもんじゃないですか」

祐子「……あの子達はね、まだ若いのよ」

祐子去る。

横内も追うように去る。

カーテンが引かれ、その手前側、旧校舎の廊下となる。

暗い廊下を、朝利と池谷が携帯電話のライトを手がかりに進む。

池谷「朝利君！」

朝利「なんで付いてくんの?!」

池谷「戻ろうって！」

朝利「(驚いて)俺のこと好きなの?!」

池谷「馬鹿言ってるんじゃないよ！ 危ないから！」

朝利「大丈夫だよ」

池谷「お母さん心配するよ？」

朝利「やめてよ子供じゃないんだから」

朝利、その場でアンテナを組み立て始める。

池谷「ちょっともう……」

朝利「……(無視)」

池谷「ねえ、朝利君……。本当にリョウタ君が見つかると思ってる？」

朝利「……」

池谷「あれから一度も、リョウタ君から連絡無いんですよ？ それって、何でだと思っ……
……?」

朝利「怒ってるから……」

池谷「へ？」

朝利「あいつ、怒ってるから、俺に」

池谷「なんで……」

朝利「ごめんちょっとここ照らして」

池谷「……」

池谷、無然としながらも朝利の手元を照らしてやろうとして、人影に気付く。

池谷「わっ！ えッ！ ぎゃあああ！！！」

朝利「なにになになに?!」

池谷、尻餅付いたりして朝利とわやくちやになる。

ライト向けると、そこに立っているのは生島。

生島、手に布のようなものを持っているが、隠す。

池谷「生島先生!!」

生島「あー……見つかっちゃった」

池谷「あー！ー！ 吃驚した!! え、ちょっと何やってるんですか!」

生島「えーあーうん(持っている布を後ろ手に隠したり)」

池谷「あ、タバコでしょ。もー。喫煙所行って下さいって」

朝利、生島を気にせず作業を進める。

生島「えくだってさ、雨なんだよ?」

池谷「もうやめればいいじゃないですか。そんなにしょっちゅうタバコばっか吸ってるから、
病気になるんですよ」

生島「え? 俺病気なの?」

池谷「あれ? ……いや違いますよ、病気になるますよって話です」

生島「この年まで来たらもう変わんないって」

池谷「ん? なに持ってるんですか?」

朝利「先輩、明かり」

池谷「えー(ライト向けてやる)」

生島「君らこそ何やってるのよ」

池谷「あー……」

生島「逢い引き?」

池谷「逢い引きって」

朝利「生島せんせー。池谷先輩がストーカーしてくるんですけどー」

池谷「あんたねえ」

生島「あらあらあらあら」

池谷「あーアレですよ、明日の準備」

生島「まー熱心だ(タバコ取りだし)」

池谷「だめですよ」

生島「(タバコしまつて) ……えらいねえ」

池谷「決まりですから」

生島「そうじゃなくてさ。よくまああの市長の言うことを聞くねって話ですよ」

池谷「だって、学校で決まったことじゃないですか」

生島「それがそもそもさ……。朝利君。君のお母さんはすごいね」

朝利「べつに。あの人のことは俺には関係ないんで」

生島「そんなこと言ったらお母さん泣くぞー(タバコ取り出し)」

池谷「だめですって」

生島「ああ、はい。えー、君らいつまでここにいるの？」

池谷「あ、私たちがいなくなったらタバコ吸うつもりでしょ」

生島「吸わない吸わない」

池谷「絶対嘘だー」

朝利「俺、しばらくここにいますよ」

池谷「いや戻ろうって」

朝利「だから戻ればって」

池谷「そういうわけにはいかないんだってー……」

三人しばし、膠着状態。

生島、アイコスのパカパカと弄んでいる。

生島「そっか。朝利君にはお母さんのやってることは関係ないか……」

朝利「関係ないでしょ普通に」

生島「そうだねー。そうやって考えられれば、楽だよね」

朝利「なんですか？」

生島「……だって、自分の母親のせいで友達が死んだなんて考えたら辛すぎるもんね」

朝利「……」

場面変わって教室。

板垣「え？ なに。なんですか？」

ゆうき「だから、リョウタ君は事故じゃなくて、誰かに殺されたかもしれないって」

板垣「やめてくださいよ。いくら小説家だからって」

ゆうき「あの研究所作るのに、いくらお金が動いたか知ってる？」

板垣「いや、そんな詳しくは……。っていうか、いいですよそんな話」

ゆうき「建設だけで、一兆円」

板垣「ぶ、ええ?!」

ゆうき「それとは別に、各国との誘致合戦のロビイング活動に数十億。運転費用は年間二百億円って言われている。勿論そのお金は、雇用や消費って形でこの町に落ちてくる。あの研究所には、貧しい漁村をサイエンスの風薫る一流都市に生まれ変わらせるって以上の価値がある。打ち出の小槌みたいなもんよ」

板垣「……」

ゆうき「それなのに、いざ建設開始って段になって、住民から反対の声が上がりが始めた。漁場を奪われた漁師達がこの重大さに気付いたのね。でもまあ、彼らが問題にしているのは結局生活の話だから、いざとなればお金で解決できる。でも、お金で動かない人がいたら? 利害関係の無い、純真無垢な地方の男子高校生が、建設反対の声を上げたなら? 打ち出の小槌が欲しくてしょうが無い大人達は、どう考えると思う?」

場面変わって旧校舎。

池谷「生島先生、そういう言い方は……」

生島「ああ、ごめんね。悪気はないんだよ」

池谷「いや、いまのは絶対悪気ありますよ。悪気しかないでしょ」

生島「二人はさ、あそこが本当は何をするための施設かわかってる?」

池谷「なんか、アレですよ? 物理の実験ですよ? なんかを衝突させて、タマをアレするんですよ? バーンで。わかってますよ?」

生島「いやそれ全然わかってないじゃん(笑) あの研究所の問題はねえ、環境破壊とか、漁師さんたちの仕事がなくなるとか、そんな些細なことじゃないんだよ」

池谷「べつに、それだって些細なことではないと思いますけど……」

生島「あそこはねえ、ブラックホールを作ろうとしてるんだよ」

池谷「はあ?」

生島「ブラックホールを作って、この世界じゃない、もう一つの世界の存在を証明しようとしてる。まあ、夢のある話だね。だけどこれがどれだけ危険な実験か、この町の人達はわかってない。君のお母さんですら、わかってない。いや本当はわかって、その上で目の利益に飛びついたのかも知れないね」

朝利「なんの話ですか……」

生島「リョウタだけが、わかってたんだよ。沖島研究所がどれだけ危険な存在か。リョウタはよく理解してた。君のお母さんや、この町の大人達の誰よりもね」

朝利「なんでそんなこと……先生が知ってるんですか」

生島「だって俺が教えたから」

場面変わって、教室。

ゆうき「ねえ、リョウタ君はあの日、ラジオでなにを訴えるつもりだったの？」

板垣「や、普通に建設反対とかそういうことだったんじゃないですか」

ゆうき「本当にそれだけ？ ねえ、なんか原稿とか残ってないの？」

板垣「わからないですよ。あの頃俺たち、リョウタとはちよつと距離おいてたんで」

ゆうき「こう考えたことない？ リョウタ君はなにか、研究所に関わる重大な秘密を知って

しまった。そしてそれを、ラジオを使って暴露しようとした。だから……」

板垣「え？ だからリョウタが殺されたって言うんですか？」

ゆうき「うん。そう」

板垣「いやちよつと……（呆れて言葉も出ない）」

ゆうき「二人はさ、あの日リョウタ君が、何時にラジオ放送するつもりだったか知ってる？」

望月「……いえ」

ゆうき「午後八時」

板垣「……？」

ゆうき「おかしいと思わない？ 放送を予定していたのは八時。そして、海が荒れ出したの

は、十時。そうでしょ？ 丁度このくらいの時間。季節外れの夜の嵐だった。思い出して」

板垣「……」

ゆうき「順当に行けば、リョウタ君は八時から放送を開始して、十五分……長くて三十分番

組をやったとしても、九時にはこちら側に帰って来られたはずなのよ。だけど番組は流れ

ず……船は嵐に吞まれた……。この二時間の間に、何かが起こった」

板垣「なんで知ってるんですか……？ 放送開始時間が、八時だったって……」

ゆうき「……」

望月「ゆうき先生は……」

ゆうき「先生じゃないの」

望月「ゆうき、さんは……」

ゆうき「はい」

望月「なんで、ノンフィクションを書こうと思ったんですか」

ゆうき「書けなくなっちゃったの。小説」

望月「え……」

ゆうき「リョウタ君のことが、気になって」

場面変わって、旧校舎。

朝利「じゃあ……先生が……。違う！ 違う違う！！」

池谷「朝利君?!」

朝利「わかったようなこといなよ！ リョウタはそんなじゃない！ リョウタはそん

なんじゃない!!」

池谷「朝利君！ 落ち着いて!!」

朝利「お前なんか、なんにも知らないくせに!! リョウタのこと、なんにもわかってないくせに――!!」

池谷「朝利君!!」

研究所のサイレンが聞こえる。

祐子と横内も、登場（それぞれ別場所にいるテイ）

みな、サイレンを聞いている。

祐子と横内、それぞれ舞台を横切り、去る。

無線機から、ノイズ混じりの歪んだジングルが聞こえてくる。

教室勢、ハッと無線機を凝視。

朝利、慌ててヘッドホンをつける。

リョウタ「えっふえむ。おーきうら……（ノイズ激しく）この放送に耳を傾け続けてくれた

同志諸君は……理解してくれることと思う……俺たちはずっと研究所の危険性を訴え……

……（ノイズさらに激しく）」

朝利「リョウタ！ リョウタ！」

池谷「聞こえていないので）何?! どうしたの?!」

リョウタ「今夜、研究所を破壊する」

生島、急に激しく咳き込み始める。

朝利、駆け出す。

池谷「朝利君！ 待って!!」

生島、激しく咳き込み倒れ込む。

池谷「生島先生！ えっ?! どうしよう! 大丈夫ですか?!」

生島の手には、血が付いている。

池谷「……!! 先生！ 血！」

生島「え……なんだろう……なんだろうな……大丈夫、ちょっと痰が絡んだだけだから。血っ
ぽい痰が……」

池谷「先生、それは血です!! すみません! これ使いますね!」

池谷、生島が持っていた布を奪い取ると、そこに大きく何か書いてあるのを見つける。
生島が持っていたのは「断固阻止」と書かれた垂れ幕。

生島「大丈夫大丈夫……」

池谷「先生……これ……」

生島、池谷から垂れ幕を奪い取る。

生島「さっき……さっき走って行ったのさ……」

池谷「先生とりあえず保健室……」

生島「あれ……だれ？」

池谷「え……？」

池谷、生島、退場。

カーテンが元に戻され……。

○7、部室

激しい雷鳴、雨音。

ゆうき「いまなんつった？」

板垣「……」

ゆうき「破壊するって言ったよね。何これ、テロ予告？」

望月「……ふっざけんなよ……」

望月、携帯を取り出す。

板垣「いやちょっと、なに」

望月「警察に通報する」

板垣「まってまってまって」

望月「こんなイタズラたち悪すぎるだろ」

板垣「いやいやいやいや」

望月「むかつかぬえのかよ！ リョウタのことなんだと思ってるんだよ！」

板垣「いやだから待ってって！」

望月「なに?!」

板垣「朝利だこれ……」

望月「え?」

板垣「朝利がやってんだって多分！」

望月「なん……」

板垣「だって今の声、聞いただろ。リヨウタの声だった。聞き間違えるわけない。朝利の他に誰がこんなこと出来るんだよ。多分、昔、朝利が録音した音源を……」

望月「リヨウタがテロ予告? あいつ昔そんなこと言ってたか?! さすがにそこまでバカじゃなかっただろ!」

板垣「じゃあ、あの、リヨウタの音声をうまいことサンプリングして」

望月「そんなこと出来るわけない」

板垣「だってあいつ MacBookPro 持ってんだぞ?!」

望月「いや……ええっ?!」

板垣「専門学校だって、二つも行ってたし……」

望月「いやだって、なんでこんなこと……」

板垣「……」

望月「え、YouTube?」

板垣「いや」

望月「YouTube の為とかだったら、俺あいつのことぶっ飛ばすよ?! てかそれこそ通報だよ!」

板垣「いや、そう言うんじゃない……」

望月「なに?!」

板垣「……」

ゆうき「自分の犯罪をごまかすためとか?」

望月「……はい?」

ゆうき「あの日、朝利君はお母さんのためにリヨウタ君を」

望月「いやいやいやいや」

ゆうき「罪の意識にさいなまれて、朝利君はリヨウタ君が死んでないって思い込もうとしてる。このイタズラも、自分はリヨウタ君を殺してないってアピールするために」

望月「先生それは」

ゆうき「先生じゃないって」

望月「……いくら先生でも、それは。そういうのはちょっと。勘弁してもらえませんか」

ゆうき「……」

望月「ノンフィクションじゃないでしょこんなの……。俺たちはあの日、海には行かなかったんです。三人で決めたんですよ。これ以上はつきあえないって」

板垣「……」

望月「未だにずっと思ってます。本当にそれでよかったのかって。だけど、そうじゃなかったら俺たちはいまここにこうして、生きてないかも知れない。そういうことを考えて考えながら、考えてもよくわからないから、ゆっくり、少しずつ納得しようとしてるんです。朝利だってああやって、なんとか自分を納得させようとしてるんです。そういう俺たちの時間を、面白おかしくフィクションにしないで下さい」

ゆうき「そういうつもりじゃ、なかったんだけど……」

板垣「望月……」

望月「なに……」

板垣「ちゃんと話そう、朝利と」

望月「話すって、言うわけ？ リョウタが死んだって？ 今更そんなに納得するか？」

板垣「わかんないけど。こんなことはやめさせないと」

望月「なんでこんなこと……」

板垣「……」

望月「マジで動画作りの為じゃないだろうな」

板垣「あいつ、あの日……海に行ったかも知れない」

望月「え？」

板垣「俺、聞いたんだよ……。事故の何日か前に、屋上で朝利とリョウタが喋ってた……」

望月「はあ？」

板垣「遠かったから何言ってるかはよくわかんなかったけど、でも、朝利が叫んで」

望月「なんて」

板垣「『いくよ』」

望月「いくよ……」

板垣「あいつ、リョウタに行くよって言ってた……」

望月「なんで黙ってたんだよいままで！」

板垣「関係ないと思っただよ。だって死んだのはリョウタで、朝利は生きてる！ あれは

きつと何か別の話でリョウタは一人で」

ゆうき「でも本当は、あの日二人は一緒にいた。そこで何かが」

板垣「殺したとは思ってないです！ 朝利がリョウタを殺すなんて絶対にあり得ない！

それはない！ ……だけど、あの日二人の間になにかがあって、それで、そのせいで朝利

がこんなに……」

望月「……疑ってるじゃん、お前」

板垣「……ちがうよ」

望月「……」

板垣「ただもう……しんどい」

朝利、駆け込んでくる。

朝利「さっきの聞いた?!」

望月「(けろっと) おお。なんだよあれ」

朝利「電波の方向、わかった?!」

望月「あ、わりい」

朝利「何やってんだよお!」

望月「ちよっとポーツとしちゃってさ」

朝利「いや、さっきの状況でよくポーツとしてられたな! 板垣は?」

板垣「ああごめん」

朝利「嘘でしょ? なにここ、人材の墓場? まあいいよつ。リョウタの居場所はだいたい

わかったから」

板垣「ええ?」

朝利「ああ、どっかに地図……携帯でいいや。ちよっと見にくいと思うけどさ」

携帯とコンパスを置く。

板垣と望月もそこに集まる。

ゆうき「朝利くん。何か二人が話したいことあるらしいんだけど」

朝利「なんだよ! あとでいい?」

望月「後でいい後でいい」

板垣「(ゆうきに) おいおいね。おいおいで大丈夫なんで」

ゆうき「あそ」

朝利「リョウタのラジオはだいたいこの……南西220度の方角から聞こえてきた」

望月「220度だったって、この方角だけじゃ発信源は特定できないだろ」

朝利「まあ、普通ならね。ただ、このライン上に何があると思う?」

朝利、携帯を弄ってみせる。

板垣「研究所……」

望月「……」

朝利「リョウタがいるとしたら、あそこしかない」

朝利、荷物をまとめ始める。

板垣「なに、ちよっとどうすんの」

朝利「研究所に行くんだよ」

板垣「待って待って」

朝利「なに！ 二人も早く荷物まとめて！」

板垣「研究所に行つてどうすんだよ！」

朝利「リヨウタを手伝う」あ

板垣「……」

朝利「研究所を破壊するんだよ」

板垣「待て。まあ待て」

朝利「さっきの聞いたでしょ？ あれは俺たちへのメッセージだよ。あの時出来なかったこ

とをもう一度、今度はちゃんと四人でやろうつて。リヨウタは俺たちを呼んでるんだよ！」

板垣「わかったからちよつと！」

板垣、朝利を座らせる。

朝利「なに」

板垣「落ち着いて、ちよつともう一回聞いていい？」

朝利「なんだよ」

板垣「研究所をどうするつて？」

朝利「破壊」

板垣「いや破壊つて」

朝利「破壊は破壊だよ。爆破でも浸水でも、方法はリヨウタがなんか考えてるんだろ？」

望月「なにお前、テロリストになるの？」

朝利「テロつてそんな、大げさなものじゃないよ」

望月「いや大げさなものだよ？！ お前、爆破つていったよねな？ それはね、大げさなこ

となの、わかる？」

朝利「え……もしかして……二人は来ないの？」

望月「行かないよ！ なにいつてんだよ」

朝利「また……？」

望月「……」

朝利「また行かないの……？」

板垣「朝利……」

朝利「リヨウタ、待ってるよ？ 俺たちのこと。またあいつを一人にするの？」

板垣「朝利、もうやめよう」

朝利「え、なに」

板垣「わかったから。な？ お前の言いたいことはわかったから」

朝利「なに、俺の言いたいことつて」

板垣「リョウタは元気でやってるよ、それでいいだろ？」

朝利「いや、元気っていうのかな、これから研究所破壊しようとしてる人間を。まあ元気は
元気か」

板垣「朝利！」

朝利「……わかった。じゃあ俺一人で行く」

板垣「待って！」

朝利「ちょ、離せよ(笑)」

ゆうき「いいじゃん行かせてあげれば」

朝利「ですよね？」

板垣「ゆうきさん」

ゆうき「それで朝利君が納得するなら、いいんでしょう？」

望月「……」

朝利「じゃあ俺ちよっと」

板垣「おい！」

朝利「なんだよっ」

ゆうき「朝利君」

朝利「はい」

ゆうき「リョウタ君に会えたらさ、彼ここに連れてきてよ」

朝利「はあ」

ゆうき「私、リョウタ君に聞きたいことあるんだよね」

朝利「わかりました！」

朝利、出て行くこうとする。

望月「俺も行く」

板垣「ええ?!」

朝利「あ！ だよな！ やったあ！ じゃ、ほら早く！」

板垣「何言ってるんだよ望月！」

望月「でも、今のままなら無理だから」

朝利「へ？」

望月「外見ろよ、嵐だぞ？」

朝利「ああ、いつの間に……」

望月「こんな天気の中、お前の『多分研究所のほうにいます』って憶測だけで海に出る
のはリスクが高すぎる」

朝利「でも」

望月「もっと正確に、リョウタの居場所を突き止めよう。その方が効率的だし、安全だ。そ

うだろ」

朝利「そうだけど」

望月「そしたら、俺も板垣も、お前と一緒にリヨウタを見つけに行ってやる。な？」

板垣「ええっ？」

朝利「一緒に来てくれんの？」

望月「な？」

板垣「うん」

朝利「おっしゃやったー！ リベンジ隊結成じゃん！」

板垣「お、おう」

望月「だから一人で危ないことはするな」

朝利「……」

望月「これ以上勝手なことをしたら、俺は、警察に通報するからな。そしたら計画は全部アだ。わかるよな」

朝利「……わかったよ。ったく、お前ってほんとビビりだよな」

望月「うるせえな」

朝利「じゃあ二人とも八木アンテナもって！ 今度またいつ、リヨウタからの発信があるかわからない。嵐は酷いし、電波状況は最悪だ。集中してことに取り組んで欲しい！」

朝利、イヤホンをつける。

板垣、望月もアンテナを組み直し、かまえる。

板垣「どうするつもり?!」

望月「こうやって俺たちが付いてれば、これ以上おかしなことは出来んだろ」

板垣「まあそうかも知れないけど」

望月「朝利が納得するまで付き合おう。朝まででもなんでも」

板垣「朝までって」

望月「そしたら……今度こそちゃんと話そう」

朝利「次で確実に、発信源を特定するつもりで、総員全力でかかれ!!!」

板垣・望月「ハッ!!!」

池谷、駆け込んでくる。

池谷「ああよかった！ 朝利くんやっぱりこっちに戻ってたんだ!! ゴメンちょっと生

島先生が具合悪くなっちゃって保健室に……。何してんの？」

望月「俺たちで、リヨウタの居場所を突き止める!!!」

池谷「なんでよ!!!!!!」

望月「うるせえ！ 男にはやらなきゃいけない時っていうのがあるんだよ！」
池谷「あんたたち、そっち側じゃなかったよね？！ こっち側だったよね？！ え？ なに
これドッキリ？ いやどういうドッキリ？！」

板垣「先輩ちよっと黙って！」

池谷「あんたまでなにやってんの！」

板垣「ちよっと、いいから。いましばらくおつきあい下さいって言う話ですよ」

池谷「何言ってるの？！」

ゆうき「いやあ〜青春だわ」

池谷「ゆうき先生、なんですかこれ？！ こうしちゃったんですかこいつら」

ゆうき「彼らはね、テロリストになる道を選んだのよ。友情のために」

池谷「なに？！」

ゆうき「さっき、リョウタ君からまた発信があってね」

池谷「え」

朝利「先輩！ 俺たちはね、リョウタと一緒に研究所を爆破する！」

池谷「嘘でしょ？！ ああ……やばい……どうしよう。朝利君お母さんは？ 私これお母さ

んに言わなきゃいけないヤツだよね？！」

朝利「(無視)」

池谷「ああもうッ……！ 市長！ 朝利市長……！！！」

○8、校内のいずこか

祐子、現れる。

池谷、駆け寄る。

池谷「市長……！」

祐子「ああなに吃驚した！」

池谷「(息を切らし) 朝利君が……研究所を……爆破するって」

祐子「なん……ええ？！」

池谷「爆破……」

祐子「何を言ってるの？」

池谷「わかりません！ でも、なんか放送があったって」

祐子「ラジオね」

池谷「そのラジオで、リョウタ君が研究所を爆破するって言ったみたいで」

祐子「なんてこと……(携帯を取りだしかける)」

池谷「それでみんな協力するって」

祐子「ああ出ないっ」

池谷「誰ですか？」

祐子「横内さん。あの人肝心なときにいつも」

池谷「どうします?! 警察に連絡」

祐子「だめよッ」

池谷「へ？」

祐子「それだけはだめ。あなたサイエンス祭をめちゃくちゃにするつもり?!」

池谷「だけど爆破って」

祐子「そんなこと出来るわけないでしょ？」

池谷「え」

祐子「これはね、ただの嫌がらせ。ことを大きくして祭が中止になればそれこそあいつの思
うつぼなの」

池谷「市長……心当たりがあるんですか？」

祐子「生島先生どこにいるかわかる？」

池谷「先生はさっき保健室に」

祐子「ありがと（行こうとする）」

池谷「でもっ」

祐子「池谷先生」

池谷「はいっ!」

祐子「先生は、圭一をお願いします。あの子に絶対、バカなことさせないで」

池谷「はい!」

祐子去る。

池谷「でも、保健室は閉まっていたので生島先生は……。ああもうッ!」

池谷その場にいるまま……

○9、部室

生島がヨロヨロとやってくる。

池谷「生島先生! 帰ったんじゃないかなかったですか?!」

生島「うん、ちょっとね」

板垣「大丈夫ですか？」

朝利「ちよっと！ 板垣集中！」

板垣「わかってるよ」

生島「(朝利に) なんで君は……なんでここにいるの？ (咳き込む)」

朝利「はあ？」

板垣「何ていうか明日の準備で」

生島「やめなよそんなの無駄だから」

板垣「え？」

生島「サイエンス祭はね、中止になるんだよ」

望月「なんでですか？」

池谷「……あの、生島先生、その件で朝利市長が探してましたよ、先生のこと」

生島「いいよほっとけば」

望月「え、マジで中止なの？」

池谷「いやそういうことじゃないんだけど……」

生島「ゴメンちよっと、あれ使ってもいい？」

板垣「無線機ですか？ え？ なんで？ てか先生無線機使えるんですか？」

朝利「だめだって！ 先生悪いけどいま、通信の待機中だから。板垣、望月いいからちよっ

と、こっちに集中してよ」

生島「君は……えーと……」

朝利「朝利ですけど？」

生島「またまたまた」

朝利「はあ？」

生島「いや、ごめん、さっきから頭がぐらぐらしちゃって」

池谷「先生やっぱり帰ったほうがいいですよ。市長には私のほうからなんとか言っておきま

すから……」

生島「だめだよ、今日は帰れない」

池谷「先生……」

板垣「(生島に) なに、先生どうしたの」

池谷「何ていったらいいか……」

池谷「悪いけどこれ使うよ」

朝利「だめですって！」

生島「大事なことなんだよ。……リョウタと連絡がつかなくなった」

望月「……はい？」

朝利「リョウタと？」

生島「なんだか急に携帯がつかなくなっちゃってね。なにか……あったのかも知れない」

生島、無線を弄り出す。

生島「えー、こちら、JA2YPN、ジュリエット、アルファ、トウー、ヤンキー、パパ、
ノベンバー……（呼び出し続ける）」

ゆうき「なに……この人なんなの？」

望月「え、ちょっと、まってまってまって先生」

生島「リヨウタと連絡が取れたらすぐ返すから」

望月「いや、リヨウタとって……」

ゆうき「……リヨウタ君が生きてるっていう設定の登場人物、増えちゃったんだけど」

板垣「そうですね……」

ゆうき「え？ お仲間？ この先の展開共有してる？」

板垣「いや、全然わかんないっす……」

ゆうき「じゃあ、ここ（朝利と生島）がお仲間？」

板垣「いや……」

朝利「待ってよ……」

望月「朝利」

朝利「なんで……なんであんたが、リヨウタと連絡とりあってんの？」

板垣「いやもう、わかんないっす……」

朝利「先生！」

生島「JE2FAO、JE2FAO。こちらJA2YPN、ちょっとこっちで連絡取れない
かな」

望月「リヨウタのコールサイン……」

池谷「先生、もうやめましょ……」

朝利「……触るな！ 返せよ！」

朝利、生島を机から引きひきはなす。

朝利「これは俺たちの無線機なんだよ！」

朝利、無線機を弄り始める。

朝利「リヨウタ？ ……リヨウタ？ 何だよ……応えてよ……」

生島「なんだ……君、ホントに朝利君なんだ……（激しく咳き込む）」

池谷「生島先生っ」

祐子、やってくる。

祐子「生島先生」

生島「ああ、どうも……」

祐子「(朝利に) 何してるの?」

朝利「……」

祐子「いいのよ、圭ちゃん」

朝利「(無線機をいじり続ける)」

祐子「(ヘッドホンを取り) もういいの。あとはお母さんに任せてね」

朝利「……」

祐子「先生、ご自分が何をされてるかわかってらっしゃいます?」

生島「……」

祐子「研究所を爆破するなんてでたらめ言いふらして」

朝利「でたらめ……?」

祐子「威力業務妨害。立派な犯罪ですよ」

生島「そう思うならどうぞ……。通報して下さい、警察でもなんでも」

祐子「あはははは。しませんよ、そんなこと」

生島「……」

祐子「頭のおかしな教師がくだらない狂言を演じてみせたって言うだけのことじゃないですか。そんなことでいちいち警察の皆様の手を煩わせるなんて。あの人達ね、結構忙しいんですよ?」

朝利「でたらめってどういうこと?」

祐子「可哀想な圭ちゃん……。あなたはね利用されたの、この男に」

朝利「え?」

祐子「この男はね、リョウタ君の名前を使って、サイエンス祭をめちゃくちゃにしようとしたの。リョウタ君の名前を出せば、あなたたちが大騒ぎするのがわかってたから。本当に酷い男。この子達の気持ちをなんだと思ってるのあなたは!!」

望月「じゃあ全部、生島先生が……ってこと?」

生島「いや、あなたに……。あなたに彼らの気持ち云々を言われるとは思いませんでしたね」

祐子「なに?」

生島「彼らの、朝利君の気持ちを一番踏みにじってるのは……。あなたでしょう」

祐子「なんです?」

生島「朝利君が、命をかけてまで阻止しようとした研究所建設を強引に押し進めて。子供が一人死んでるんですよ? その犠牲の上に、サイエンスの風薫る一流都市ですか? 正気の沙汰とは思えない」

祐子「……あれは、不幸な事故だったんです」

生島「そうやって……息子さんの墓前で説明してるんですか？ あなたが死んでも、私はこの町のために研究所を作るって？」

祐子「何を言ってるんです？」

生島「あなたには、自分の息子を殺したって自覚がないんですか」

祐子「はい？ ちょっと、あの、リョウタ君は私の息子じゃありませんけど」

生島「なにを言ってるんだか……」

祐子「なんなんですか?!」

生島「朝利圭一君ですよ。あの日、リョウタと一緒に海に出で、それきり帰らなかったあんたの息子!」

祐子「……はい？」

朝利「え……俺……?」

生島「(咳き込む)」

池谷「ちょっと先生……」

生島「だから……なんで君がここにいるんだ!! 君は死んだはずだろ!! (激しく咳き込む)」

池谷「先生! もうやめて下さい!」

祐子「なに、狂ったの?」

池谷「先生ちょっと具合が悪くて!」

生島「大丈夫大丈夫」

池谷「先生さっき血を吐いたんです!」

板垣「えっ」

池谷「朝利市長、私、もう救急車呼びますね?!」

祐子「だめよ!」

生島「いいんだよ」

池谷「よくないですよ! だって生島先生死んでるんですよ?!」

生島「へ……」

板垣「え?」

池谷「あれ?! (飛び退く) だって生島先生、三年前にガンで……」

望月「なに、これ……」

池谷「あれ……? だってさっき二人が……あれ?!」

横内やってくる。

鼻血が出ている。

横内「ああっ朝利先生! よかった、まだいらしたんですね!」

祐子「……なに。ちょっと横内さんあなた全然電話繋がらないじゃない」

横内「ああっすいません！ ちょっとまずいことになってて」

祐子「なに」

横内「漁協の連中が役場取り囲んじゃって！ いまにももう窓ガラス割る勢いで！ あれもうほとんど暴動ですよ！ どうします？」

祐子「なにやってんのよ。岩見さんは？ 呼んだの？」

横内「はい？」

祐子「岩見さん。岩見のおじいさん。漁協の人達の間に入ってもらってるじゃないいつも。

あの人になんとかしてもらって。いまこっちはこっちで大変なんだから」

横内「いや、朝利先生、やだなあ。岩見の爺さんは、亡くなったでしょ」

祐子「やだ、うそ！ もうっこんな時に……車の中に喪服積んでたわよね？ ちょっと香典

袋とってきてもらえる？」

横内「いやいや違いますよ。岩見の爺さんですよ、婆さんじゃなくて」

祐子「え？ だから爺さんでしょ？」

横内「はい。え？ だから、岩見の爺さんは、八年前に死んでるじゃないですか」

祐子「え？」

横内「ほら地震で」

板垣「地震？」

祐子「なにを言ってるの……？」

横内「東日本大震災ですよ。ね？ 爺さんあの日たまたま出張であっちの方行って。そう

だったでしょ？」

板垣「東日本大震災……？」

望月「そんな地震あったか？」

池谷「え……わかんない……」

横内「はあ？ いやちよつと。冗談なら趣味が悪すぎますよ」

祐子「やめてちょうだい……」

横内「地震ですよ、地震」

祐子「やめなさい！ あなたいつまで鼻血たらしてるの！」

横内「鼻血？（確認して）あっホントだ！ 鼻血だ！！ なんだこれいつの間に。（鼻血をハンカチでぬぐいながら）いや、あったじゃないですか地震！ 凄いでかいヤツ。だから漁協の連中の騒いでるんでしょ？ あんなに大きな地震があったのに、素粒子なんかとかとか、訳のわからない施設？ 作っちゃって。しかも海に！ 危ないだらって話でしょ！」

祐子「横内さん！」

横内「まあ、俺も共犯なんですけど……」

ゆうき「漁協とは補償金の額で揉めてたんじゃないんですか？」

横内「いや違いますよ！ そんなことなら、もっとちゃちゃっと解決できます」

横内、ハンカチで鼻を何度もぬぐい。

横内「なんですか皆さん。狐につままれたような顔しちゃって。いや、狸か。俺が殺した。狸の呪いですかね？ ゆうき先生」

ゆうき「え……？」

横内「いや違う、狸はいなかったんだ……（鼻をぬぐい）なんだこれ全然止まらない」

望月「マンデラエフェクト……」

板垣「え？」

望月「マンデラエフェクトだろこれ……。現実とは異なる記憶を、複数人が共通して持つ。そうですよね」

ゆうき「え……そうなのかなこれ、いやちょっとまって……」

望月「リョウタが生きてる記憶を持つ人間と、朝利が死んだ記憶を持つ人間と、生島先生が死んだ記憶を持つ人間と、地震が起きた記憶を持つ人間……。現実と異なる記憶を持つ人間がこんなに存在してる」

横内「だから、地震は絶対ありましたって」

望月「でも俺たちはそれを知らない。これってだって、そうだろ？」

板垣「えつまりどういうこと？」

望月「マンデラエフェクトは、並行世界の情報が現実世界に干渉することで起こる……。俺ゆうきさんの本で読みました。そうですよね！」

ゆうき「そうだけど」

望月「だからつまり、リョウタが生きてる世界の情報が、現実干渉して……。なにを言ってるんだ俺は……（自分で冷静にツッコむ）」

生島「だから言ったんだ……」

池谷「生島先生」

生島「あの研究所がどれだけ危険か……。なのにあなたはいっさい耳を傾けようとしなかった……（咳き込む）」

池谷「先生安静にしてた方が……」

生島「早く研究所を停止して下さい。事象の流出が起こり始めてる……」

望月「事象の流出……」

生島「マンデラエフェクトだよ。研究所のブラックホールが並行世界を引き寄せたせいで情報の混線が起こってる……。このままだと複数の世界線が衝突しますよ……」

祐子「さ、もうそんな馬鹿みたいな話は終わりにして。横内さん、生島先生を病院にお連れして」

横内「あ、はい。すいません鼻血だけちょっと」

生島「この咳ね……。わかったわかった……。これ……。俺どっかの世界線で死んでるんだね。そ

うでしょ（池谷に聞く）」

横内「いやちよっとなに言ってるかわかんないですけど」

生島「あれかな、肺がんなのかなこれは……」

望月「あ、肺がん……」

生島「なんだ……せっかくアイコスに替えたのにな……」

横内「あんま意味ないですよそれ」

祐子「横内さん、おしゃべりに付き合わなくていいから早くして」

横内「あ、すいません（しかし鼻血が気になる）」

生島「朝利君、そこからリヨウタに呼びかけて。今すぐ研究所を爆破しろって」

祐子「横内さん！」

朝利「え……」

生島「いや違う……リヨウタは死んでるのか……」

望月「でたらめじゃないんだ……」

板垣「え？」

望月「研究所のせいで、現実とは違う世界が近づいて混ざり合ってるんだって」

祐子「望月君までやめてちょうだい」

望月「だけど実際に起こってることじゃないですか！ マンデラエフェクトも、リヨウタのラジオ放送も。これは、リヨウタが生きてる世界の情報が電波に乗って流れ込んで来た……

……そういうことですよね？」

板垣「え、全部マジなの？」

望月「マジのマジ！ でたらめじゃないんだって！ 生島先生の言ってることも、横内さん

の言ってることも、朝利が言ってることも！」

朝利「……」

望月「本当に、リヨウタは生きてるんだな……？ お前の言ってたことは本当だったんだ」

板垣「朝利の世界では、リヨウタは生きてるってこと？」

朝利「……」

望月「ゆうきさん、そうですよね?! 並行世界は本当に存在するんだ。ゆうきかおりの小

説みために！」

ゆうき「待って！ 待って待って待って。そんなことありえない！」

望月「だってゆうきさんも書いてるじゃないですか！」

ゆうき「望月君、あなたこそフィクションとノンフィクションをごちゃごちゃにしてる。今

起こってることは、フィクション！ こんなのはでたらめ！ ……そうですよね市長」

祐子「ええ、ああ、そうね。ごめんなさいね先生。恥ずかしいところをお見せしちゃって」

ゆうき「いや、すごいですねこれ。……こんなコトまでしてごまかしたいですか？ 誰がリ

ヨウタを殺したか」

祐子「はい？」

ゆうき「大丈夫ですよ。今更警察に通報しようなんて思っていないですから。私は、ただ知り
たいだけなんです。あの子に何があったか。ねえ、朝利君」
板垣「ゆうきさん」

ゆうき「ねえ、朝利君。見てこれ。リヨウタからのメール。あの子ね、私にメールくれたの
よ。もう何年も連絡取り合ってたのに」

望月「え？」

ゆうき「ここにほら！ 書いてある。午後八時に、ラジオの周波数を88に合わせろって！
君がリヨウタと待ち合わせしてから、嵐がやってくるまでの二時間、君はリヨウタに何し
たの！」

朝利「……」

望月「あの……メール？」

板垣「え、なんでリヨウタがゆうきさんにメール……」

ゆうき「リヨウタに聞いたことなかった？ お姉ちゃんがいるって。小説家の」

朝利「……」

ゆうき「年の離れた兄妹だったの。親が離婚した頃にはもう私は家を出て……何年も連絡
とってなかった。なのにあの子はあの日、メールをくれた。今夜八時にラジオを聞いてっ
て。ねえ……リヨウタは私になにを伝えようとしたの？ あの子はなにを知ってしまった
たの？ お願い正直に話して。もうこんなことは止めにして」

朝利「ごめんなさい……」

板垣「朝利……」

ゆうき「お母さんに言われた？ リヨウタ君を殺さないって」

祐子「なにを言ってるの……」

朝利「ごめんなさい」

祐子「あなたが謝ることなんてなにもないでしょ？」

朝利「……俺が、リヨウタを殺したんだ」

望月「おい、朝利。違うよな？ それも並行世界の情報だろ？ 現実じゃない記憶が、お前
の中に入り込んでるんだよ！ マンデラエフェクト！」

利「違うよ……並行世界の記憶なんて無い」

望月「……」

朝利「俺ずっとわかってたよ……リヨウタはもういないって」

板垣「朝利……」

望月「なんだよそれ」

ゆうき「……朝利君、何があったのか、ちゃんと話して」

朝利「……」

祐子「圭ちゃん、あの日圭ちゃんはお母さんと一緒にいたよね？ 海には行かなかったじゃ
ない。そうでしょ！」

ゆうき「正直に言つて！ 君が勇気を出せば、あの日リヨウタが出来なかったことを私がやってあげる！ お母さんの罪を暴いて、あんな研究所、全部ペアにするの！ リベンジ隊、結成してたじゃん！」

朝利「違う！ 違います！ リヨウタはそんなことがしたかったんじゃない！！」

祐子「圭ちゃん大丈夫だから、落ち着いて。先生、もう帰っていただけですか」

ゆうき「帰りませんよ。外はこんなに酷い嵐なんだから」

朝利「研究所なんて、ほんとはどうでもよかつたんだ……」

ゆうき「え？」

朝利「ただ……沖島にはリヨウタの家があつて……おじさんとおばさんが離婚する前に、家族みんなで住んでた家があつて……」

ゆうき「……」

朝利「研究所が出来たら、みんな取り壊されちゃうから……」

ゆうき「なに……？」

朝利「リヨウタは……その家を守ろうとしてた……みんなでまた、家族四人であの家で暮らしたいって……。だから、俺、約束したんだ、行くよって」

ゆうき「なにそれ……。そんなことのために？ おかしいでしょ、そんなはずない……。じゃあなんであの子は殺されたの？ 殺されるようなことなにもしてないじゃない！」

祐子「だから、この子はなにもしてません！」

朝利「……」

祐子「リヨウタ君のことはお気の毒でしたけど、おかしい言いがかりはよしてください。この子はあの日、海には行ってないんです。ね？ そうでしょ？ あの日圭ちゃん、お母さんの言うこと、わかってくれたよね？ この町には研究所が必要だって、この町の人たち全員と、お母さんの人生がかかっているって」

朝利「……」

祐子「圭ちゃんわかつたつて言ってくれたよね。お母さんのために、お家にいてくれたでしょ？」

朝利「……」

ゆうき「朝利君、ほんとのこと話して」

朝利「海には……行かなかつた」

祐子「ね？ そうなんです」

朝利「だから……リヨウタは死んだんだ……」

ゆうき「どういうこと……？」

朝利「俺が……約束を破つたから。いくよっていったのに……行かなかつたから。リヨウタは、俺を待ってたんだ……2時間も……」

ゆうき「……なにそれ」

朝利「ごめんなさい……」

ゆうき「なんで？　なんで行かなかったの。お母さんに止められたってなんだったって、行けば良かったじゃない。あなたがちゃんと約束を守ってたら、あの子死ななくてよかったのに！」

朝利「俺も、家族を守りたかったから」

サイレン。

世界が歪み始める。

無線機から再びジングルが聞こえてくる。

今度はジングルだけでなく、ニュース音声や自然音、様々な並行世界の音声が津波のような濁流となって流れ込んでくる。

横内「なんですか、これ……」

生島「朝利先生、はやく研究所を停止しないと……」

祐子「だめ。そんなことできない」

生島「きこえませんか、これ。世界が近づいてくる音ですよ」

朝利「生島先生」

生島「なに」

生島「あっちの世界ではリョウタは生きてるんだよね。なのに、なんで俺はそう思えないの……？　俺、ずっと思おうとした。リョウタは生きてる。リョウタは生きてる、生きてる生きてる生きてる。でもそう思おうとするたびに、リョウタが死んでくんだ。毎日、毎分、毎秒。リョウタが死んだってことばかり頭に浮かぶんだ。なんで俺は先生みたいに、リョウタが生きてるって思えなかったの」

生島「リョウタが生きてる世界では、君が死んでるからだよ。君とリョウタの世界線は、決定的に離れているんだ。命の質量分」

朝利「命の質量分……」

生島「とてつもなく遠いってこと」

朝利「わかった」

朝利、出て行こうとする。

祐子「どこ行くの」

朝利「ん。ちょっと屋上みてくる。この嵐だし、アンテナ心配だから」

板垣「え？　このタイミングで？」

朝利、無視して出て行く。

板垣「おい、ちょっと朝利！」

望月「……………いこう」

板垣「うん」

板垣、望月、朝利を追って出て行く。

祐子「池谷先生」

池谷「あ、はい」

池谷も朝利を追って出て行く。

生島「本当にいいんですね」

祐子「こんな茶番はいい加減止めてちょうだい！」

生島「こつちの世界にはリョウタはいないんです。研究所を爆破することは出来ない。あなたが止めない」と

祐子「横内さん、早く生島先生をお連れして！」

横内「でもこれ、なんかなんか凄いい感じになってますけど」

祐子「いいから！ 研究所はね、この町の悲願なんです。あの研究所一つで、この町が抱える全ての問題が解決するの。並行世界だかなんだか知りませんが、現実は、ここにしかない。今ここにあるものが全て。魚が捕れなくなって、みんな仕事を失って、荒んで卑屈になって、この町を離れていく……………。あなたのお母さんだってそうでしょ」

ゆうき「……………」

祐子「おうちひとつ残ってたところで、あなたたち家族は、沖島に帰ってきた？」

ゆうき「……………」

祐子「現実っていうのは、そういうことですよ。あの日、何があったとしても、私はあの子を止めたし、あの子は海には行かなかつたし、リョウタ君は亡くなった。今更、研究所もサイエンス祭も、なかつたことには出来ません」

生島「とりかえしのつかないことになりますよ」

祐子「とりかえしなんて、もう、ずっとずっと昔から、つかないですよ」

池谷、駆け込んでくる。

池谷「朝利君が！」

祐子「なに」

池谷「屋上に立てこもりました！」

暗転。

○10、屋上

暗闇の中、強い風、雨。

朝利「ずっと見てる夢があつて」

明転。

朝利は、アンテナの前に立っている

板垣、望月はバリケードの後ろに立ち、朝利に呼びかけている。

板垣「朝利！ 開けろ！ 開けろって！！」

朝利「こう……棒があるんだよ。こんな長い、八木アンテナみたいな」

望月「なにしてたんだよおまえ！！」

朝利「それでその両端に、黄色いレインコートを着た人と、俺が立ってるのね」

望月「鍵は？！ 屋上の鍵！！」

板垣「さっき朝利に渡しちゃったんだよ！！」

望月「馬鹿！！」

朝利「で夢だから、俺はもうわかってるんだ。もうすぐ、どっちかが落ちて死ぬって」

板垣「おい！ 朝利！！」

朝利「それで……ほっとする。よかつたあつて。俺が落ちれば、リョウタは死ななくてすむ
んだって。なんだ、よかつたって」

望月「なにする気なんだおまえ！！」

朝利「あっち側に行く」

望月「はあ？！！」

朝利「向こう側の世界が近づいてるんでしょ？ 今なら俺、向こう側にいけると思うんだ」

板垣「馬鹿いってんなよ！！ 止めろ！！」

望月「無理だってそんなの！ 生島先生言ってただろ！ お前が生きてる世界と、リョウタ
が生きてる世界は遠すぎるって！！」

朝利「命の質量分だろ？」

望月「おい！！」

朝利「命ひとつ分のエネルギーがあれば、向こうに行けるんだよ！！」

望月「やめろ！！」

板垣「朝利！」

朝利「……」

板垣「おい聞いているのか朝利！！」

朝利「なに」

板垣「リヨウタが死んだのはお前のせいじゃない」

朝利「俺のせいだよ」

板垣「違う！俺たち全員のせいだ！！」

朝利「違うよ。二人は悪くない」

望月「お前が行かなかったからリヨウタが死んだんじゃない。俺たちが止めなかったから、

リヨウタは死んだんだ」

朝利「……」

板垣「ずっと考えた。なんでリヨウタは死んじゃったんだらうって。それこそ、毎日毎分毎

秒！お前がリヨウタの話するたびに、なんで俺たちあの時リヨウタを止めなかったんだらうって。考えて、考えて考えてただけ……怖くて、お前にいえなくて」

朝利「なんで怖いのか」

板垣「ほんとに、俺たちが取り返しつかないことをしたんだって……思いたくなくて」

望月「でも、止めなきゃいけなかった！あの時何をして、俺たち三人でリヨウタを引き

止めなきゃならなかったんだ！」

朝利「取り返しはつくよ」

板垣「朝利……」

朝利「大丈夫。俺がリヨウタを連れてくるよ」

望月「止める！おい止める！」

朝利「いくよ」

板垣「今度こそ俺たちに引き止めさせてくれよ……」

朝利「いくよ……」

朝利、飛び降り、暗転。

○11、校庭

暗闇の中、雨合羽を着た人々が懐中電灯をゆっくりと照らしながら彷徨っている。

(フードを被っているときは、群衆として。台詞の時はフードを取り喋る)

無線機用の机、舞台中央に移動している。

祐子、池谷、ゆうきフードを取り、

祐子「見つかった?!」

池谷「いません!」

祐子「あの子、本当に屋上から飛び降りたの?!」

池谷「わからないです! 板垣君たちが屋上に入った時には、誰もいなくなっていて……朝利君、消えちゃったんです!」

祐子「ああっ……」

ゆうき「本当にあっち側に行っちゃったのかも。リョウタに会いに……」

祐子「……」

池谷「朝利君、帰ってきますよね……?」

ゆうき「……」

池谷「どうするんですか! (ハッとし)……爆破!! 研究所を爆破ですね?!」

祐子「だめよ……そんなことできない!」

池谷「市長!!」

祐子「とにかく、今は圭一を探してちょうだい!!」

ゆうき、池谷、祐子、再び群衆に戻る。

群衆の中から板垣と望月現れ、無線機に向かう。

ノイズが聞こえ始める。

板垣「こちら、JAZYPN、ジュリエット、アルファ、トゥー、ヤンキー、パパ、ノベンバー、

沖浦高校無線部です」

望月「JE2FAP、JE2FAP、ジュリエット、アルファ、トゥー、フォックストロット、アル

ファ、パパ。聞こえますか」

徐々に暗転していく。

板垣「聞こえますか?」

望月「朝利」

板垣「聞こえますか?」

暗転。

○12、事象の地平(海底)

朝利の声がこだまする。
雨合羽の男、手を振り続ける。
暗転。

○13、部室

校庭の喧噪。
救急車の音。

板垣「朝利！」

明転。

朝利、無線機に向かっている。

板垣、望月、池谷は二場冒頭の立ち位置。

ゆうきは窓から外を眺めている。

校内放送「(年配の男の声)えー、まもなく十二時です。校内に残っている生徒は早く帰りなさい。えーまもなく十一時、完全下校の時間です……」

板垣「どう、誰かいた？」

朝利「いやー、誰もいない」

望月「今時無線なんてなく。やるヤツいないでしょ」

朝利「そういう消極的な態度が、無線業界を衰退させるんだよ」

望月「おーいつの間に業界背負うようになったんだよ」

ゆうき「(窓の外を見て)あーこりゃ偉い騒ぎだわ。お祭りじゃん。いまがお祭り状態じゃんむしろ」

池谷「(発信器持って)ねー……これどうすんのって」

望月「どうすんのって、持って帰るけど普通に」

板垣「あゝあ」

望月「祭中止になっちゃったんだから」

ゆうき「ねえ、ギャラと交通費出ると思う？」

板垣「どうすかね? 朝利、お前ポケットマネーで出せよ」

朝利「なんでだよっ」

板垣「これ……おばさん、なんて説明するんですかね?」

ゆうき「研究内容の透明性の確保と、安全性がなんちゃらされるまで研究所は停止!」と

かじゃない？」

板垣「まあ、それ以上はなんとも言えないですよね」

ゆうき「お母さんも大変だ」

望月「(アンテナ一式) これなあゝせっかく研究室の先輩に借りただけだなあ」

朝利「え！ そのひとのコールサインなに？ 今度四人でラグチューしようよ」

望月「いいけど……。かなりめんどくさいタイプのオタクだよ」

池谷「あんたが言うならそうとうだわ」

望月「うるせっ」

池谷「明日学校休みになるよねー？」

板垣「かも知らないけど、俺たちは仕事なんじゃん？」

池谷「あーあたしも生島先生と救急車乗ってけばよかった」

望月「健康優良児のくせに」

朝利「横内さん、鼻血出ただけなのに乗ってっただけだね」

池谷「吐くー。仕事したくなさ過ぎて吐くー」

望月「がんばんなさいよ、大人なんだから」

祐子やってくる。

祐子「圭ちゃん、お母さんまだ今日ちよつとかかりそうだから帰りは横内さんに……。いやあ

の人病院だわ。誰かに送り頼むから。それかタクシー呼ぶんだったらレシートあれして」

朝利「お母さん」

祐子「……。なに？」

朝利「俺今日は帰らないよ。この後みんなで呑み行こうって話してて」

望月「いやお前朝まで呑むつもり？」

板垣「勘弁してよー」

朝利「積もる話もあるし。リョウタを偲んで」

祐子「あ、そう」

祐子、去りかけて、再び朝利に詰め寄り、

祐子「あ、でもちゃんつと話はしようね。あなたの就職のこと。お母さんまだyoutuberの

話忘れてないから。忘れてないし、全然納得してないから」

朝利「わかったって。ちゃんとその辺のことも三人で話つめるから」

望月「まじかー……」

板垣「いや俺きびしいよ？」

祐子「好きにしなさいっ」

祐子、去る。

朝利「……えっ YouTuber になっついでいっつことかー！」

板垣「多分違うんじゃないかな？」

ゆうき「あっ」

池谷「どうしました？」

ゆうき「ギャラのこと聞くの忘れてる。せめて交通費……。出版社から落ちるかな……」

池谷「そういうのって本出せばもらえるんじゃないですか？」

ゆうき「うれればね」

池谷「きびしー」

板垣「はいそろそろ荷物まとめて。完全下校の時間ですよ」

朝利「へいへい」

望月「どうするんですか？ これ。ノンフィクションで出すんですか？」

ゆうき「ノンフィクションは無理じゃない？」

望月「ま、そうですよね」

ゆうき「フィクションで書くよ。ふつーに小説で書く」

望月「お、楽しみにしてまーす」

ゆうき「書けるとは言っていない」

望月「あれー」

板垣「ほれー。早く出る」

朝利「どこ行く？」

池谷「あ、雨やんでる。ラッキー」

望月「いまからだ隣町まで出ないと無理だろ」

板垣「誰が運転する？」

朝利「えー」

ゆうき「あたし免許持ってませーん」

望月「最初はグー」

板垣「まじかー」

朝利達がじゃんけんをする声、遠ざかっていく。

誰もいない教室。

無線機からノイズ混じりのジングルが聞こえてくる。

リヨウタを含めた、四人の楽しそうな声。

リヨウタ「はい、じゃあいくぞー」

この戯曲を許可無く掲載・上演することを固く禁じます。掲載・上演に関するお問い合わせは、
タカハ劇団 info@takaha-gekidan.net まで、お問い合わせ下さい。

四人「えっふえむ、おきうらこうこう」

望月「いや違う違う、歌下手か」

リヨウタ「ええ？」

四人「えっふえむ、おきうら」

リヨウタ「ふへへへへ」

朝利「おい！」

リヨウタ「いやごめん、久々すぎてちょっと」

板垣「えっふえむおきうら（調子外れ）」

望月「いや歌下手か！」

朝利「笑っている」

リヨウタ「まってるって、だから」

四人「えっふえむ、おきうらこうこう。88メガヘルツ（グダグダ）」

朝利「いやちょっとちがくない？」

望月「リヨウタよ」

リヨウタ「え？ おれえ？」

四人「（それぞれに口ずさんで確認）」

朝利「はい。いい？ ちよっといくよ？ せーの」

ノイズはそこで途絶える。
おわり。